

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第20集

広島市安佐北区可部町所在

番谷遺跡 発掘調査報告

1997・3

は し が き

広島市安佐北区可部は古くから広島市と中国山地,さらには日本海側諸都市への交通の要衝として栄えてきました。また可部地区は古くから遺跡の存在が多く知られている地域のひとつですが,近年にいたるまで組織的な発掘調査はほとんど行われていませんでした。番谷遺跡は可部の中心部から少し北に入った,福王寺山から南東に延びる尾根上につくられた弥生時代の墳墓群です。

このたび,番谷遺跡は林道建設に伴い記録保存されることになり,平成7年6月から同年11月まで現地で調査を行いました。その結果,石棺墓,土墳墓,または中世のものとみられる配石遺構などの遺構や,弥生土器,縄文土器,または石鏃,石材といった遺物が見つかりました。いずれも当時の人々の生活を知るうえで欠かせないものばかりです。

番谷遺跡に立って眺めてみると,南側には太田川とその平野に広がる可部の町並みを,北側には南原の集落とはるか中国山地の山並みを望むことができます。今後,古代の人々も眺めていたであろうこれら遺跡からの景色も見られなくなりますが,この報告書が少しでも多くの方々に活用され,郷土の歴史や文化の1ページに,この遺跡がたしかにあったのだと覚えていただければ調査をした者にとって幸甚です。

最後になりましたが,発掘調査を進めるにあたりご指導・ご助言をいただきました諸先生方ならびにご協力いただきました調査補助員の皆様には心からお礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

例 言

1. 本書は広島市安佐北区可部町における可部町南原線林道建設にともない、平成7年度に実施した番谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は広島市安佐北区役所農林建設部農林土木課から委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3. 本書はⅠ, Ⅱ, Ⅴ-2を田邊嵐, Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ-1を宮田浩二が執筆し, 宮田が編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は宮田, 田邊, 吉富紀子, 栗林隆幸, 三好愛が分担して行った。
5. 遺物の実測及び写真撮影は宮田, 田邊が分担して行った。
6. 図面のトレースは宮田が行った。
7. 本書掲載の航空写真撮影はスタジオ・ユニに委託した。
8. 第1図, 第2図に使用した地図は国土地理院発行の25000分の1地形図「飯室」「可部」「祇園」「西原」を複製したものである。また, 第3図に使用した地図は広島市発行の2500分の1地形図「F-10」を複製したものである。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 遺 構	8
IV 遺 物	23
V ま と め	25

挿 図 目 次

第1図 番谷遺跡周辺地形接峰面図	2	第9図 第5号墓実測図	18
第2図 番谷遺跡周辺遺跡分布地図	4	第10図 第6号墓実測図	18
第3図 番谷遺跡周辺地形図	7	第11図 第7号墓実測図	19
第4図 番谷遺跡遺構配置図	9	第12図 第8号墓実測図	21
第5図 第1号墓実測図	10	第13図 第9号墓実測図	21
第6図 第2号墓実測図	12	第14図 中世の配石遺構	22
第7図 第3号墓実測図	15	第15図 出土遺物実測図	24
第8図 第4号墓実測図	16		

図 版 目 次

図版 1a 番谷遺跡遠景(北から・調査前・航空写真)	図版 7a 第3号墓(開棺前)
b 番谷遺跡遠景(南西から・調査前・航空写真)	b 第3号墓(完掘後)
図版 2a 番谷遺跡からの風景(南方向・太田川側)	図版 8a 第4号墓(開棺前)
b 番谷遺跡からの風景(北方向・南原側)	b 第4号墓(完掘後)
c 番谷遺跡近景(東から・調査後)	図版 9a 第5号墓(開棺前)
図版 3a 番谷遺跡近景(南西から・調査後)	b 第5号墓(完掘後)
b 林道工事中に発見された第1号墓(北から) 図版 11a 第7号墓(開棺前)	図版 10a 第6号墓(開棺前)
図版 4a 第1号墓(開棺前)	b 第6号墓(完掘後)
b 第1号墓(完掘後)	図版 11a 第7号墓(開棺前)
図版 5a 第2・3・4号墓(西から)	b 第7号墓(完掘後)
b 第2号墓(検出状況)	図版 12a 第8号墓(開棺前)と第9号墓
図版 6a 第2号墓(開棺前)	b 第8号墓(完掘後)と第9号墓
b 第2号墓(完掘後)	図版 13 中世の配石遺構(東から)
	図版 14 出土遺物

I はじめに

広島市教育委員会(以下,市教委とする)は,1991(平成3)年,広島市安佐北区役所農林建設部農林土木課(以下,安佐北区役所とする)より,可部町南原線林道開設工事地内で発見された石棺の取扱いについて協議を受けた。市教委は,1991(平成3)年11月18日から11月20日まで試掘調査を行い,その結果,計画地内には,発見された石棺のほかにも埋蔵文化財が存在していることを確認した。市教委と安佐北区役所はこの取扱いについて協議を重ねたが,林道ルートの変更を含め現状での保存は困難であり,記録保存もやむを得ないという結論に達した。これを受けて安佐北区役所は,財団法人広島市歴史科学教育事業団(以下,事業団とする)に発掘調査を委託して行うこととした。事業団は,1995(平成7)年4月から調査の準備を進め,同年6月12日から11月29日まで現地調査を実施した。

調査実施に係る関係者は下記のとおりである。

調査委託者 広島市安佐北区役所農林建設部農林土木課

調査受託者 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課

調査関係者 松原 明二 常務理事

山出 健志 文化財課長

若島 一則 文化財課事業係長

調査者 宮田 浩二 文化財課事業係指導主事

田邊 嵐 文化財課事業係学芸員

調査補助員(50音順)

石原 光江,柿崎 一三,鴨下 広司,栗林 隆幸,佐々木敬三,住川 義治,坪木 征子

寺島 憲惣,戸井 逸子,殿岡 鉄博,三木 耕三,水野 敬三,三好 愛,宗近 幸子

森脇 啓崇,山本 治孝,吉富 紀子

整理作業員(50音順)

河合 淳子,佐伯ひとみ,菅原 彰子,住川香代子,橋本 礼子

なお,安佐北区役所農林建設部農林土木課,市教委,三入公民館,福川義秋氏ほか多くの方々には,調査を円滑に進めるため,多大なご配慮とご協力をいただいた。また調査期間中,潮見浩広島大学名誉教授,広島大学文学部考古学研究室川越哲志教授,河瀬正利助教授,古瀬清秀助教授,市教委石田彰紀課長補佐,幸田淳課長補佐から貴重なご指導,ご助言をいただいた。さらに報告書作成にあたっては,財団法人広島県埋蔵文化財調査センター山田繁樹氏ほか多くの方々から広範なご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

なお,石棺の移設・保存にあつては,広島市立亀山南小学校岸本博芳校長ほかの諸先生方,および前述の安佐北区役所農林建設部農林土木課に御尽力いただいたことを特に記して感謝したい。



第1図 番谷遺跡周辺地形接峰面図 (S = 1 : 75000)

Ⅱ 位置と環境

番谷遺跡は広島市の北郊、安佐北区可部町大字綾ヶ谷字番谷と大字大毛寺字原迫にまたがって所在している。本遺跡は中国山地の南限を画する福王寺山(496.2m)の山頂から南東に延びる稜線鞍部の緩傾斜面に位置し、遺跡の最高所の標高は207m、最低所は203mである。遺跡から南方を望めば、正面に阿武山の副峰がそびえ、その前面に太田川の造る沖積平野が広がり可部の町を望むことができる。目を転じて北方を見やれば、南原川の造る谷底平野から南原の集落、さらには中国山地の脊梁部へと連なる山々を眺望でき、南北の二方向に限られるが生活や生産の場を一望できる位置にある。

それでは、本遺跡を中心とした古地形の性向を、接峰面図をもとに推定しうるかぎり復元してみよう。本遺跡のある福王寺山塊は中国山地の主体を成す脊梁山地から派生する一山稜ではあるが、南西方向に山腹を持つために周囲の山塊に比べるとなだらかな山容であったと見られる。遺跡はこの福王寺山の頂上から延びる稜線の鞍部に位置している回この鞍部は稜線中では唯一の南原側・太田川側双方の谷頭侵食の接点にあたる場所であり、他所と比して開析を受けやすかったと見える。遺跡の下方には谷頭浸食部を取り巻くように丘陵尾根が発達しているが、南原側がほぼ浸食限界に達してなだらかな丘陵状を示しているのに対し、太田川側は傾斜が急で双方で景観が異なる。また南原川をはさんで対岸から三篠川流域にかけては、中国山地脊梁部の延長である高松山山塊や可部と白木を隔てる白木山あるいは螺山山塊がそびえ、福王寺山塊とは異なった急峻な山容を示している。

ところで、本遺跡の所在する可部地区は中国山地との接点にあたり、古くは太田川の舟運⁽¹⁾、あるいは中国山地を越えて日本海側との運輸・交易で栄えた出口集落として、また、近年では広島北郊の中心として栄えてきた町である。位置的な好条件はそれ以前も変わらない状況であったと思われ、縄文時代のものから近世のものまで多岐にわたる遺物が田畑や山林から出土しており、往時から人々の生活の営みがあったことが窺える。しかしながら、組織的な発掘調査はほとんど行われておらず、実態が解明されている遺跡は少ない。

まず縄文時代については、遺物がわずかながら出土しており、断片的に我々に情報を与えてくれる。大林の草田と南原からは磨製石斧⁽²⁾が、城からは石鉄が見つまっている⁽³⁾ほか、後期のものと考えられる磨消縄文の土器片が大毛寺所在の給人原1号古墳の石室内の流入土から発見されている⁽⁴⁾。

これに続く弥生時代については、可部地区では住居跡等の生活や生産を物語る遺構をもつ遺跡が現在までのところほとんど確認されていない。この時代の遺跡としては可部高校グラウンド遺跡⁽⁵⁾、南原八幡神社遺跡⁽⁶⁾、上ヶ原遺跡⁽⁷⁾、虹山A・B遺跡⁽⁸⁾、王地遺跡⁽⁹⁾などが挙げられる。これらの遺跡はおもに沖積平野の縁辺部や丘陵の突端部に位置しており、宅地造成中や土砂採取中に弥生土器片や石器等が発見されているもので、実際に確認されている遺構としては三入の下町屋の王地遺跡の袋状土壙が知られる程度である。また出土した土器片をみるとその多くが弥生時代後期の特徴を示していることから、この時期には多くの人々が沖積平野を生産地として生活を営んでいた可能性が高いと考えられる。このほか、大毛寺の両延八幡神社から平形銅剣が7本出土したことが江戸時代の書物に記されているものの⁽¹⁰⁾、現在その所在は知られておらず、詳細は不明である。

一方、本遺跡と同様に墳墓を中心とした遺跡としては、まず可部中心部から北方約2キロの三入の下町屋に位置する丸子山遺跡⁽¹¹⁾が挙げられる。この遺跡は丘陵尾根の先端部から中腹の斜面にかけての部分に位置し、弥生時代中期から後期にかけて営まれていたと考えられており、15基の箱式石棺が発見されたほか、8体分の埋葬人骨が残存していたことが確認されている。これらの石棺のうち、被葬者に赤色顔料が散布されてい



第2図 番谷遺跡周辺遺跡分布地図 (S = 1 : 62500)

- 1. 番谷遺跡 2. 南原八幡神社遺跡 3. 王地遺跡 4. 丸子山遺跡 5. 上ヶ原遺跡
- 6. 両延八幡神社遺跡 7. 虹山A遺跡 8. 虹山B遺跡 9. 可部高校グラウンド遺跡
- 10. 皆川山遺跡 11. 足谷遺跡 12. 恵下山遺跡群 13. 寺迫遺跡 14. 末光遺跡群
- 15. 西願寺北遺跡 16. 西願寺山墳墓群 17. 大久保遺跡
- A. 給人原古墳群 B. 青古墳群 C. 原迫古墳群 D. 上ヶ原古墳群 E. 城ヶ平古墳群
- F. 九品寺南古墳群 G. 九品寺北古墳群 H. 虹山古墳

るもの(第1号石棺)や被葬者の左手首にイモ貝製の腕輪が装着されているもの(第6号石棺)が確認されており、この2基の石棺の被葬者については生前の社会的地位が他の者に比べて高かったことを窺わせる。またイモ貝製の腕輪が発見されたことから、丸子山遺跡に埋葬された人々が南方の人々と交易を行っていたことが示唆される。

次に本遺跡から北東へ約10キロ、根之谷川と三篠川を隔てる山塊を三篠川側に下った白木町志路には佐久良遺跡⁽¹²⁾がある。この遺跡は丸子山遺跡と同様に丘陵尾根上の緩斜面に位置し、出土土器等から弥生時代中期後半頃に営まれた可能性があると考えられており、箱式石棺10基、石蓋土壙墓1基、土壙墓2基が確認されているほか、9体分の埋葬人骨も残存している。いずれの石棺からも人骨以外の出土遺物はなかったものの、4基の石棺内には赤色顔料が散布されていることが確認されている。また佐久良遺跡のある志路周辺をみると、このほかにも土井石棺群⁽¹³⁾や宮崎神裏社遺跡⁽¹⁴⁾などの弥生時代の墳墓群が確認されているが、本格的な発掘調査が行われておらず詳細については不明である。

さて本遺跡をはじめとする丸子山遺跡、佐久良遺跡の3つの墳墓群は①いずれも太田川、三篠川という大河川の北側に位置している、②墳墓群の主体が箱式石棺である、③墳墓群内における各墳墓の形態に大きな差が見られない、④見通しの効く丘陵尾根上に立地している(番谷遺跡は峠の鞍部)、などの共通点が見られる。しかしながら、営まれた時期については弥生時代中期から後期にかけてと時期的に幅があるうえ、各墳墓群とも時期を確定するだけの出土遺物に乏しいことから、3つの墳墓群がほぼ同時期に存在していたかどうかについては現状では明確にしがたい。

ところで太田川・三篠川以北に位置する墳墓群のひとつである安佐町飯室の恵下遺跡⁽¹⁵⁾では、丘陵尾根上先端部に位置し、明確にしがたいものの弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれたと考えられている。この遺跡から確認された墳墓は土壙墓が53基で、箱式石棺はわずか4基であり、土壙墓が墳墓群の主体となっている。このことから、箱式石棺を墳墓群の主体とする本遺跡を含めた上述の3つの遺跡とは、墳墓の形態において異なる傾向を示した遺跡と捉えることができる。

一方、太田川、三篠川以南で太田川左岸にある高陽地区に眼を向けると、弥生時代後期の墳墓群がいくつか確認されており、大久保遺跡⁽¹⁶⁾、西願寺山墳墓群A地点⁽¹⁷⁾、西願寺北遺跡⁽¹⁸⁾、末光遺跡A-2地点⁽¹⁹⁾などの墳墓群はいずれも眺望のよい丘陵上に位置している。これらの墳墓群は土壙墓もしくは土器棺墓から成り立っており、箱式石棺はほとんど確認されていないことから、これらの遺跡も本遺跡と墳墓の形態において異なる傾向を示しているといえる。

さて上述のように可部地区では弥生時代後期の遺跡が比較的多く確認されているほか、出土遺物もかなりの数にのぼっているのにもかかわらず、それに続く古墳時代前期の遺跡や古墳等は少なく、上ヶ原遺跡や王地遺跡等から弥生時代後期の出土遺物に伴って、土師器などが少々出土するのみである。

また古墳については番谷遺跡が所在する福王寺山の南麓に集中して存在しており、広島市域では最大級の古墳の集中地区として知られ、「可部古墳群」と呼ばれている⁽²⁰⁾。さらに古墳は古墳時代前期と後期のものに分けられるが、前期の古墳には上ヶ原古墳群⁽²¹⁾のうちE支群の6基などが挙げられるが全体的に数が少なく、箱式石棺を内部主体とする小規模な古墳であるという一般的な特徴以外には明確ではない。一方、後期の古墳としては先の「可部古墳群」が挙げられ、本遺跡の南側に存在する原迫古墳群⁽²²⁾をはじめ、給人原古墳群⁽²³⁾、青古墳群⁽²⁴⁾、上ヶ原古墳群⁽²⁵⁾、九品寺北⁽²⁶⁾、九品寺南古墳群など確認されているものだけでも87基にのぼり、前期のものに比べて圧倒的に数が多く見られる。これらに含まれる古墳は横穴式石室を持つ直径10~20mの円墳がほとんどで、出土遺物として、須恵器、土師器や鉄鏃、玉類が出土している。

以上のことから、可部地区では墳墓群が数多く確認されているものの、人々の生活を彷彿とさせる集落跡などの遺跡はほとんど確認されておらず、せいぜい出土する遺物で窺い知る程度である。さらに遺跡の分布については太田川左岸に多く見られ、右岸側の遺跡については太田川・三篠川の合流地点南の八木・縁井地区に下がるまで見当たらない。番谷遺跡も太田川左岸の遺跡であり、弥生時代を中心にする墳墓群の遺跡であるが、従来発掘例が少なかった可部地区での調査であり、広島市域北部での弥生時代墳墓群の特徴を知る上で好資料を得たといえよう。

注

- (1)土井作治 「近世の可部」『可部町史』 1976
- (2)福谷昭二 「歴史のあけぼの」『可部町史』 1976
- (3)注(2)に同じ
- (4)注(2)に同じ
- (5)注(2)に同じ
- (6)注(2)に同じ
- (7)注(2)に同じ
- (8)注(2)に同じ
- (9)注(2)に同じ
- (10)藤井貞幹 「好古日録」 1797
- (11)石田彰紀 「中山の歴史のあけぼの」『中山町史』 1991
- (12)広島市教育委員会 「佐久良遺跡発掘調査報告」 1984
- (13)広島市教育委員会 「広島市遺跡分布地図」 1990
- (14)注(13)に同じ
- (15)広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「恵下遺跡発掘調査概報」 1980
- (16)財団法人広島市歴史科学教育事業団 「大久保遺跡発掘調査報告」 1992
- (17)広島県教育委員会 「西願寺遺跡群」 1974
- (18)注(11)に同じ
- (19)広島市教育委員会 「末光遺跡群発掘調査報告」 1980
- (20)注(2)に同じ
- (21)注(2)に同じ
- (22)注(2)に同じ
- (23)はにわ会 「可部古墳群一目で見る給人原古墳群」 1974
- (24)注(2)に同じ
- (25)注(2)に同じ
- (26)注(2)に同じ



第3図 番谷遺跡周辺地形図 (S = 1 : 7500)

Ⅲ 遺 構

1. 調査の概要

番谷遺跡では林道工事で石棺1基の存在が、また市教委の試掘で石棺数基の存在がそれぞれ明らかになっていたため、本遺跡が石棺墓を中心とする墳墓群である可能性が高いことが予想された。このため本発掘調査ではまず遺構の存在する範囲を確認するため、南側にある斜面と里道横の平坦地にトレンチを入れたが遺構は確認できなかった。

次に尾根上平坦面においては、尾根筋にほぼ沿うように基線を設け、これに沿って畦を残して土層観察を行った。またこの基線に沿って碁盤目状に14の調査区を設定して遺構の検出を行った。土層観察の結果、表土から1m前後下位からは約10～20cm幅の黒褐色土層が、第1号石棺を除く本墳墓群や配石遺構を含む尾根上の調査範囲内のほとんどで確認できた。また黒褐色土層の下層では暗黄褐色土層や赤褐色土層などが確認できるほか、調査範囲の東側にある里道近くでは上述の土層の下位にさらに暗茶褐色土層が見られる。

調査の結果、本遺跡からは箱式石棺8基、土墳墓1基及び配石遺構が確認できた。遺物は土師質土器が配石遺構内から出土したほかは遺構に伴うものではなく、調査区内東側の斜面を中心として弥生土器、縄文土器、石鏃、石材などが出土した。

なお9基の墳墓は暗黄褐色土層や赤褐色土層内から、配石遺構は黒褐色土層内からそれぞれ確認できた。また出土した弥生土器の多くは暗黄褐色土層や赤褐色土層からのもので、縄文土器はすべて暗茶褐色土層から出土した。

2. 遺 構

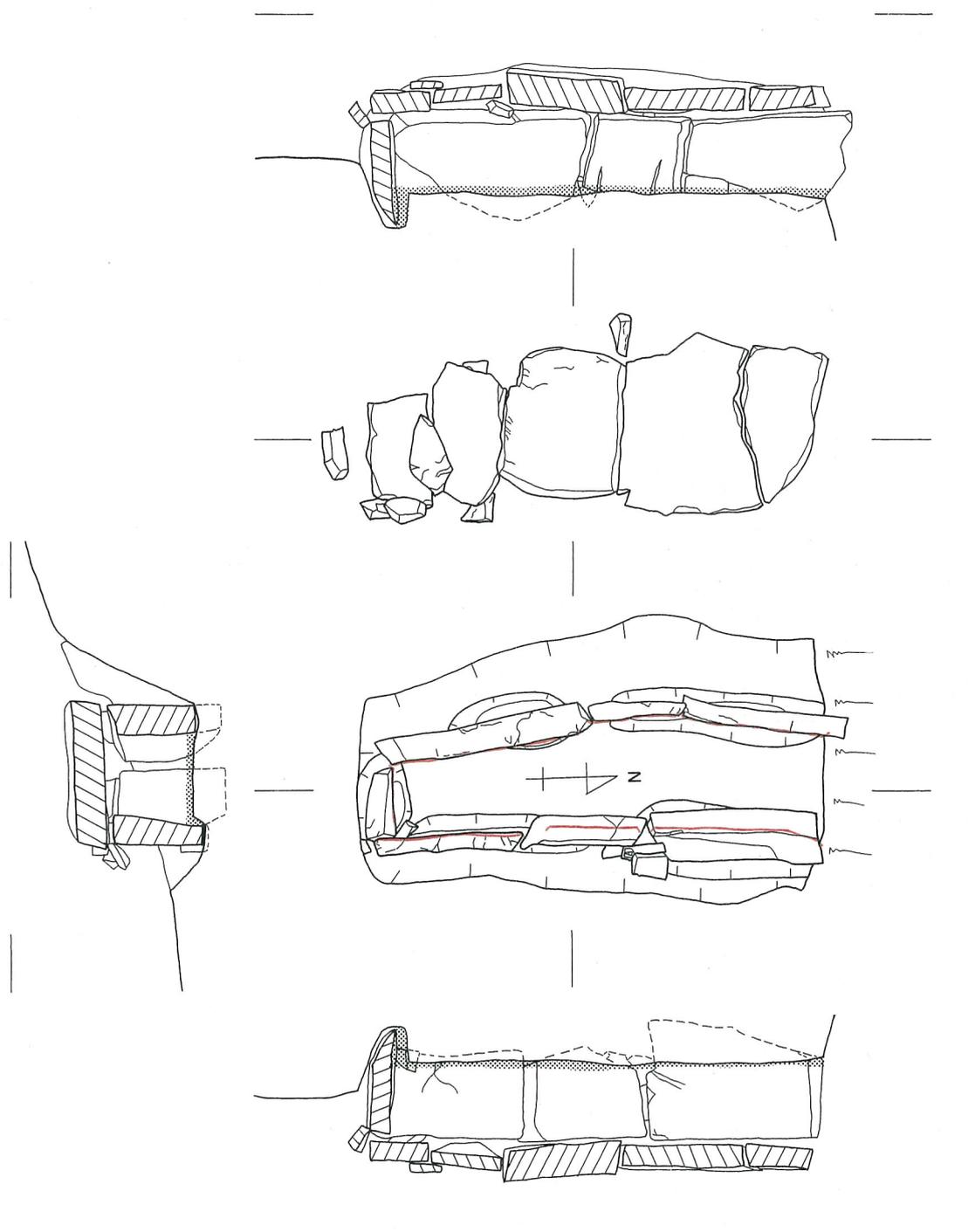
第1号墓(第5図)

第1号墓は発掘調査区域内で最も北側に位置し、本遺跡が発見される契機となった箱式石棺であり、他の墳墓とは若干距離をおいて存在している。発掘調査区域の北側については林道工事による法面となっており、その法面に石棺の一部が露呈していたことから、発掘調査前からその存在は確認できていた。

石棺が埋置されている墓壇は上述のとおり北側の一部が削り取られているため、その一部を欠失している。墓壇内の底面は幅が中央部で56cm、深さが現状で西側が最大で57cm、現存する長さは172cmである。またこの底面には棺材の上端の高さを揃えることと棺材の安定を図るための掘り込みが東側と西側に各2ヶ所、南側に1ヶ所確認できる。石棺の主軸はN2°Eとほぼ南北を示している。また石棺も上述のとおりその一部を欠失している。石棺の規模は内法で幅が中央部で36cm、南側の小口で30cm、深さが中央部で30cm、現存する長さは168cmである。遺存する墓壇と石棺の規模等から判断して、石棺の北側部分について大きく削り取られたとは考えにくい。遺存する石棺は側壁として東側と西側に各3枚の板石が、小口として南側に1枚の板石がいずれも横長に使用されている。また側壁や小口の棺材の安定を図るために棺材の下に10～20cmの角礫を詰め込んである。側石と南側の小口石の組み方は側石が小口石を挟んでいる。蓋石は5枚の板石が使用されているが、北側にある2枚は現状では割れているものの築造時は1枚の大型の板石であったと考えられる。また南側にある2枚には、蓋石間の隙間をうめるために小型の板石が置かれている。蓋石は北側のものが大きく、南側に配置されているものほど小さくなる傾向がみられる。また蓋石と側壁石や小口石との間にも隙間をうめるために10cm前後の角礫が詰め込まれている。被葬者の頭位は棺内の幅が南側よりも北側が広いこ



第4図 番谷遺跡遺構配置図 (S = 1 : 200)



L = 204.0 m
 0 1m
 ※アミ目は、棺床土

第5図 第1号墓実測図 (S = 1 : 30)

と蓋石が北側から南側になるにつれて小さくなっていることから、北方向と考えられる。また棺内において厚さ約3cmの棺床土が確認でき、石棺の床面と考えられるレベルは中央部で203.3mである。

なお石棺の内部には土砂がかなり流入していた。また石棺内から人骨及び遺物は出土しなかった。

第2号墓(第6図)

第2号墓は尾根のほぼ中央部に位置し、第1号石棺から南へ約2mのところに存在する箱式石棺である。石棺が埋置されている墓壇は東側の一部が確認できなかったものの、墓壇内の底面の長さは201cm、幅は中央部で111cm、深さは現状では西側が最大で50cmある。この底面には棺材の上端の高さを揃えることと棺材の安定を図るための掘り込みが北側と中央やや西寄りに各1ヶ所と東側から南側にかけて周回しているものが確認できる。石棺の規模は内法で長さが181cm、幅が北側の小口で42cm、南側の小口で27cm、深さが中央部で27cm、主軸はN31°Eである。石棺は側壁として東側に3枚、西側に4枚の板石が、小口として北側と南側に各1枚の板石がいずれも横長に使用されている。また西側の側壁の板石間には隙間をうめるために角礫が挟み込まれている。側石と小口石の組み方は南側の小口では側石が小口石を挟んでいるが、北側の小口では小口石が側石を押さえている。蓋石は5枚の板石が概ね横長に使用されているが、これらの板石は形状、厚さ等が不揃いであるにもかかわらず蓋石間にほとんど隙間がないように設置されている。なお北側から2枚目のものが最も大型で、これから南側に配置されているものほど小さくなる傾向がみられる。被葬者の頭位は棺内の幅が南側よりも北側が広いことや、蓋石をみると概ね北側から南側になるにつれて小さくなっていることから、北方向と考えられる。また棺内において厚さ約2cmの棺床土が確認でき、石棺の床面と考えられるレベルは中央部で202.6mである。

なお石棺の内部には土砂が充満していた。また石棺内から人骨及び遺物は出土しなかった。

さて現状で石棺が埋置されている墓壇の掘り方にはほぼ沿った位置の上方から、この石棺を取り囲むような状態で板石6枚と角礫2個を確認できる。これらの板石と角礫のうち、石棺の北側についてみると板石3枚と角礫1個を確認できるが、3枚の板石については長さ約50cm、幅が約30～40cm、厚さが約10cmでほぼ同様の大きさのものがいずれも横長に立てられた状態で存在している。またこれら3枚の板石は上面の標高が203.40～203.51m、下面の標高が203.07～203.09mであることから、上面、下面ともほぼ同レベルと考えられる。特に下面の標高差が2cmであることから、下面の標高を揃えて3枚の板石を設置したと推定できる。

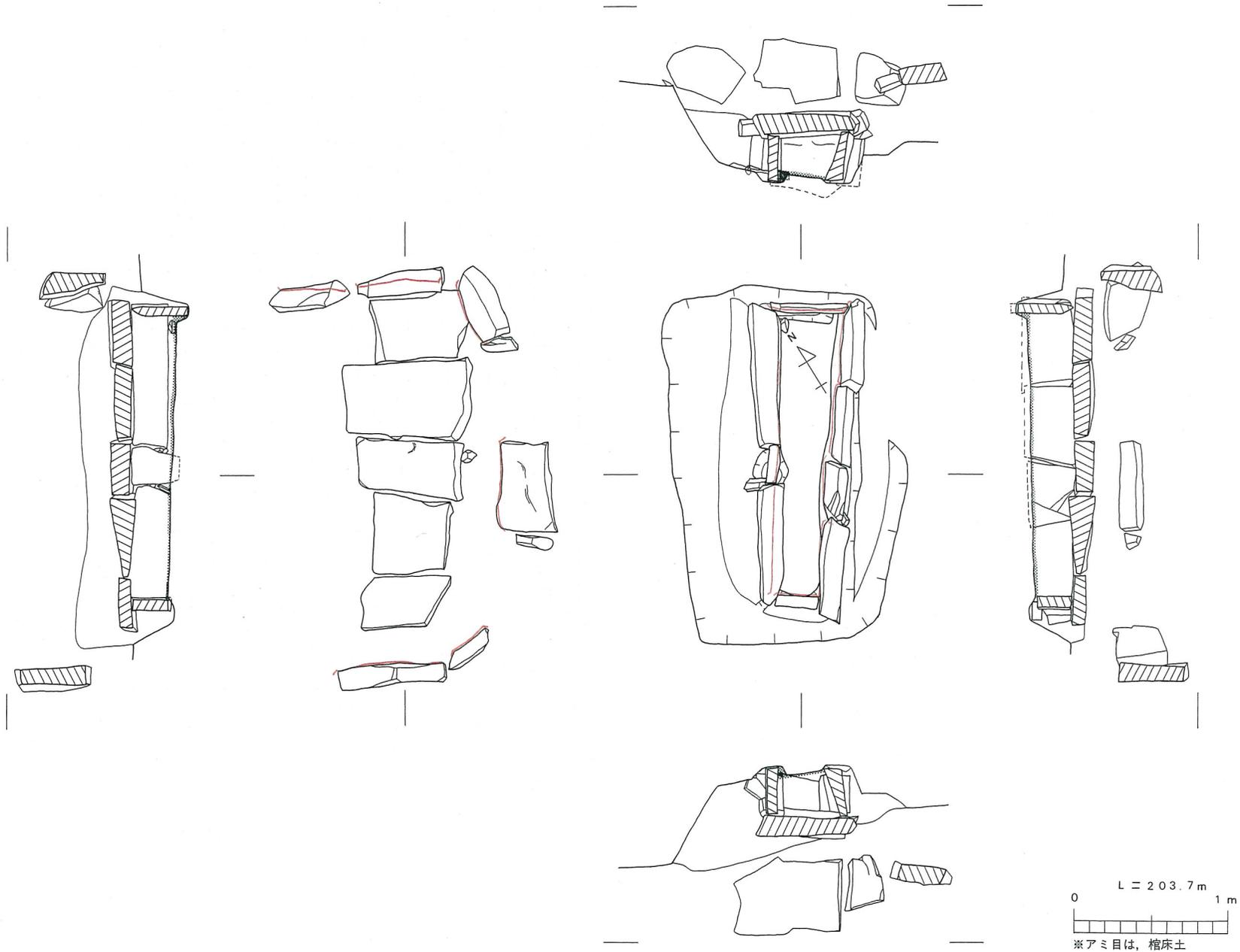
石棺の南側についてみると板石2枚を確認できるが、これらは大きさこそ違うもののいずれも横長に立てられた状態で存在し、下面の標高が203.14mと203.15mでほぼ同レベルと考えられる。このことから、下面の標高を揃えて2枚の板石を設置したと推定できる。なお上面の標高は203.50mと203.65mで大きな差が見られる。また2枚の板石のうち、西側のものは長さが約65cm、幅が約45cm、厚さが約15cmと6枚の板石のなかでは最も大型のもので、板石の上面から約20cm程はかなり激しく風化した痕跡がその表面に確認できる。

石棺の東側についてみると長さが約55cm、幅が約30cm、厚さが約10cmの板石1枚が幅の広い面を上方に向けた状態で確認できる。この状態で、板石上面のレベルをみると石棺側で203.33m、東側で203.30m、下面のレベルは石棺側で203.23m、東側で203.18mある。

このほか石棺の西側すなわち尾根を掘り込んでいる方向の掘り方上方からは何も発見しなかったほか、石棺を埋置した墓壇内の埋土中からも何も確認していない。

以上のことから、これらの板石についてみると

①第2号墓である箱式石棺を取り囲むような状態で、石棺が埋置されている墓壇の掘り方にはほぼ沿った位置の上方で確認している。



第6図 第2号基実測図 (S = 1 : 30)

②石棺の北側ないし南側で確認した板石のなかで、それぞれ東端に位置する板石は大きさこそ違うもののいずれも石棺を意識して広い面をその方向に向けているように見える。

③石棺の北側の板石群のなかで中央に位置するものと南側の板石群で西端にあるものとは、いずれも石棺の小口に平行となる位置にあり、しかもそれぞれの板石群のなかでは最も大型の板石である。

④石棺の東側にあるものが唯一状態が異なっているものの、6枚の板石下面の標高をみると203.07～203.18 mではほぼ同レベルであると考えられることから、下面レベルを揃えて設置されたものと推定できる。ということがいえる。

これらのことから判断して、これらの板石と角礫は第2号墓である箱式石棺に伴う施設であると考えられる。その場合、この施設は第2号墓の墓壙内に石棺が埋置された後、墓壙を埋めもどす過程で石棺が完全に埋めもどされた状態において、墓壙の掘り方にはほぼ沿った位置の上方に板石を設置したものと考えることができる。また石棺の東側にある板石を除いた5枚の板石はいずれも立てられた状態であったことから、板石をこの状態で設置しておくためには少なくとも板石の全部又は一部を埋めておかなければならないと思われる。現状から板石の設置時にどちらの状態であったかを明確に立証することは難しいものの、石棺の南側に位置する大型の板石において上面から約20cmまでかなり激しく風化した痕跡が確認できることから、板石のこの部分についてはかなりの長期間にわたって外気に触れていた可能性があることが想像できる。つまり、この風化した痕跡が見られる板石の部分より下位の部分が埋められた状態で設置されていた可能性があると考えることができよう。もしこの板石がそのような状態であったと仮定するならば、残りの立てられた状態で発見した4枚の板石についても設置時にそれぞれの板石の上部がわずかに外気に触れる状態であったと想定することもできよう。

しかしながら、上述のように5枚の板石がその一部を埋められて立たされた状態であったと想定するならば、石棺の東側にある板石については幅の広い面を上方に向けて完全に埋められた状態であったと予想できる。そうすると、この板石だけが他の5枚の板石と違って完全に埋められて設置されたのか、その設置意図が明確にできない。

しかるに、この板石の下面レベルをみると他の立てられた状態の5枚の板石とほぼ同じであることや、設置位置が尾根上におけるレベルの低い側であるということ等から、この板石についてはこの位置に設置した時点では他の板石同様に立てられた状態であった可能性が高く、その後、何らかの圧力が加わって東方向に倒れたと考えるほうが自然であろう。

以上のことから、これら6枚の板石の設置状況を推測すると板石はいずれも横長に立てられた状態で、墓壙の掘り方にはほぼ沿った位置の上方にある程度埋められ、その一部を地表に出した状態で設置されていたといえよう。その場合、石棺の南側に位置する大型の板石が上面から約20cm程度地表に出された状態であるとすれば、他の5枚の板石についてはそれぞれ約5～10cm程度地表に出した状態で設置された可能性が高いと考えられよう。

また設置された板石だが、石棺の西側すなわち尾根を掘り込んでいる側や石棺が埋置された墓境内の覆土中からも何も確認していないことや、これらの出土状況等から判断して現状で確認した6枚のみと思われる。次にこの6枚の板石をみると、北側の中央に位置するものと南側にある大型のものはいずれも埋置されている石棺の小口に平行になるような位置に立てられた状態で設置されていることから、これらの板石は第2号石棺を挟んで向かい合うような位置に設置されたと考えられる。さらにこれら2枚の板石のそれぞれ東側に位置する板石はいずれも石棺方向を意識して設置された可能性があることから、北側及び南側の板

石群については、まずはじめに上述の2枚の板石が設置されて、これらを基準として残りの立てられた板石が配置されたことが予想できる。

これらのことをまとめると、第2号石棺を取り囲むような状態で配置された板石群は、第2号石棺と他の石棺とを明確に区別するために設けられた施設であることが推定できる。すなわち、第2号石棺内に埋葬された人物と本墳墓群内の他の墳墓に埋葬された人々とを明確に分けようとしたものと捉えることもできよう。また立たされた状態の板石群が板石の一部を地表に露出させていた場合、第2号石棺だけは一見してその位置を確認することができることから、この板石群については第2号石棺の位置を示す墓標としての役割を果たしていた可能性も考慮する必要がある。

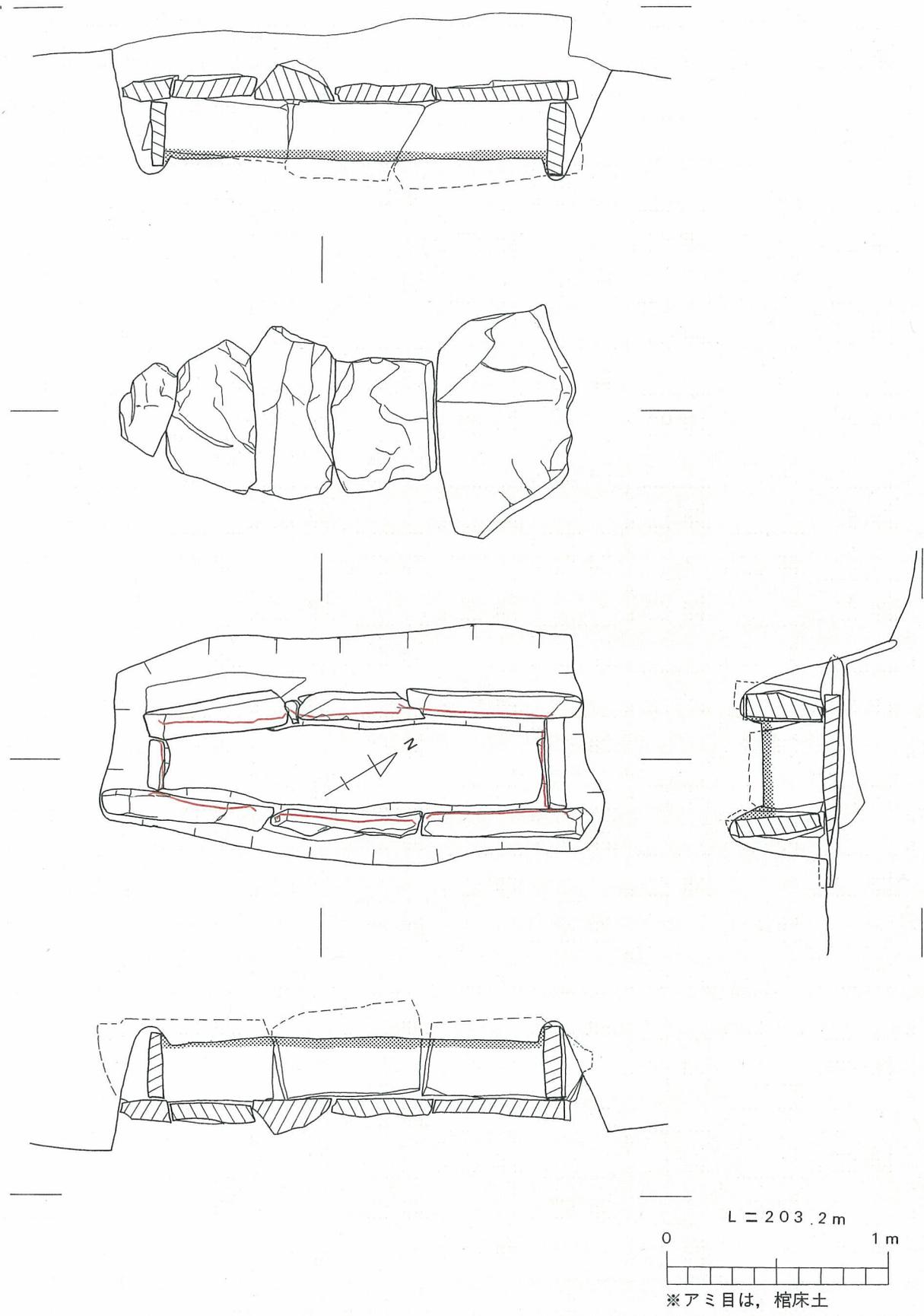
第3号墓(第7図)

第3号墓は尾根のほぼ中央部に位置し、第2号石棺の南西に隣接した箱式石棺である。石棺が埋置されている墓壇内の底面は長さが190cm、幅が中央部で77cm、深さが現状で西側が最大で57cmある。この底面には棺材の上端の高さを揃えることと棺材の安定を図るための掘り込みが東側と西側に各1ヶ所、北側と南側に各1ヶ所確認できる。石棺の規模は内法で長さが171cm、幅が北側の小口で43cm、南側の小口で32cm、高さが中央部で27cm、主軸はN32°Eである。石棺は側壁として東側と西側に各3枚の板石が横長に、小口として北側に1枚の板石が横長に、南側に1枚の板石が縦長に使用されている。側石と小口石の組み方は両小口とも側石が小口石を挟んでいる。蓋石は5枚の板石がいずれも横長に使用されている。最も北側にある蓋石は100cm×60cmと本石棺群で使用されている蓋石のなかでも最大のもので、南側に配置されているものほど小さくなる傾向がみられる。被葬者の頭位は棺内の幅が南側よりも北側が広いことや、蓋石が北側から南側になるにつれて小さくなっていることから、北方向と考えられる。また棺内において厚さ2～5cmの棺床土が確認できることから、石棺の床面と考えられるレベルは中央部で202.6mである。

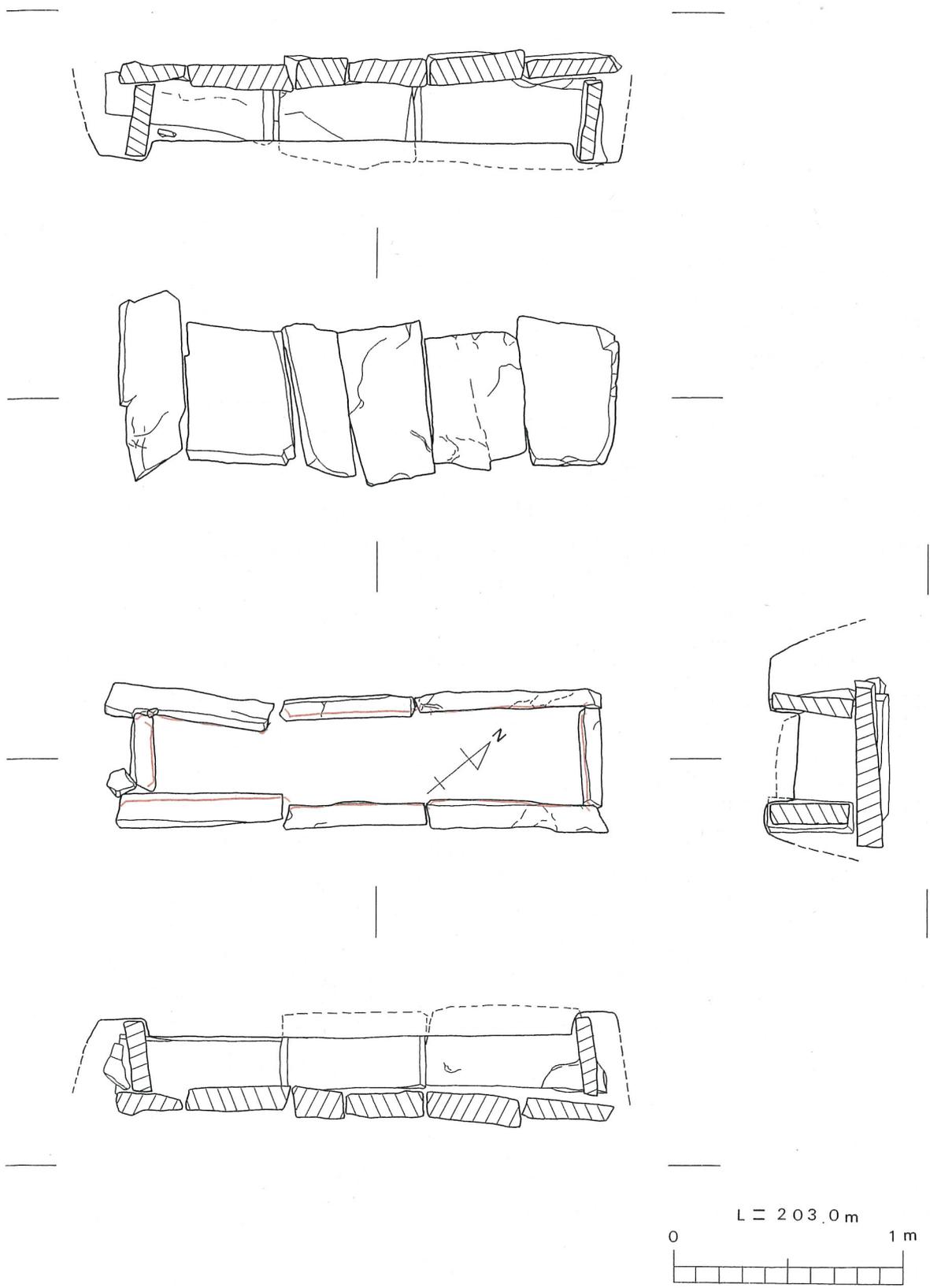
なお石棺の内部には南側の1/4を除いて土砂がかなり流入していた。また人骨及び遺物は出土しなかった。

第4号墓(第8図)

第4号墓は尾根の中央部に位置し、第3号石棺から南東へ約1.2mのところ存在する箱式石棺である。石棺が埋置されている墓壇の掘り方については明確にしえなかったものの、現状から判断して墓壇の底面は長さが220cm、幅が80cm程度であったと考えられる。石棺の規模は内法で長さが187cm、幅が北側の小口で43cm、南側の小口で35cm、深さが中央部で25cm、主軸はN39°Eである。石棺は側壁として東側と西側に各3枚の板石が、小口として北側と南側に各1枚の板石がいずれも横長に使用されている。現状では西側の側壁のなかで南側にある板石がやや内側に入り込んでいるため、この部分における棺内の幅が狭くなっているが、本石棺の他の側壁の状況等から判断して築造時には中央にある板石と接するように設置されたものと思われる。このことから、石棺の側壁及び小口についてはほとんど隙間なく板石が設置されていたと考えられるため、他の石棺と比較してつくり方が比較的丁寧であるといえる。側壁石と小口石の組み方は両小口とも側石が小口石を挟んでいる。蓋石は6枚の板石が横長に使用され、蓋石間にほとんど隙間がないように整然と配置されている。これらの板石は長さこそ差がみられるものの幅が60cm前後、厚さが10cm前後で比較的大きさの似通った石材であるといえる。被葬者の頭位は棺内の幅が南側よりも北側が広いことから北方向と考えられる。また棺内において蓋石下面から約25cm低いレベルにおいて暗黄褐色土の固く締まった面を確認したが、その状況からこの面が棺床面と考えられる。このことから、石棺の床面と考えられるレベルは中央部で202.4mである。



第7図 第3号墓実測図 (S = 1 : 30)



第8图 第4号墓实测图 (S = 1 : 30)

なお石棺の内部には土砂がかなり流入していた。また人骨及び遺物は出土しなかった。

第5号墓(第9図)

第5号墓は尾根中央部やや北寄りに位置し、第4号石棺から南東へ約1mのところにある。石棺が埋置されている墓壇の掘り方については明確にしえなかったものの、現状から判断して墓壇の底面は長さが110cm、幅が40cm程度であったと考えられる。現状の墓壇内の底面からは棺材の上端の高さを揃えることと棺材の安定を図るための掘り込みが4ヶ所あることが確認できる。石棺の規模は内法で長さが97cm、幅が北側の小口で29cm、南側の小口で21cm、深さが中央部で17cm、主軸はN44°Eである。石棺は側壁として東側に2枚、西側に3枚の板石が横長に、小口として北側と南側に各1枚の板石が縦長にそれぞれ使用されている。両側壁には、側壁の長さを揃えるためと板石間の隙間をうめるためと考えられる幅約10cmの角礫が1つずつ詰め込んである。また現状では西側の側壁のいずれの板石も20°～30°内傾しており、このことから側壁上面の幅が棺床面の幅より約5cm狭くなっている。側石と小口石の組み方は北側の小口では側石で小口石を挟んでおり、南側の小口では小口石で側石を押さえている。蓋石は3枚の板石が使用されているが、南側のものが縦長に、残り2枚は横長に配置されている。被葬者の頭位は棺内の幅が南側よりも北側が広いことや、蓋石をみると北側から南側になるにつれて小さくなっていることから、北方向と考えられる。また棺内において蓋石下面から約20cm低いレベルにおいて暗黄褐色土の固く締まった面を確認したが、その状況からこの面が棺床面と考えられる。このことから、石棺の床面と考えられるレベルは中央部で202.5mである。

なお石棺の内部には土砂が充満していた。また人骨及び遺物は出土しなかった。

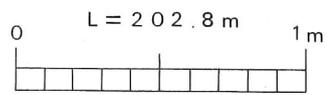
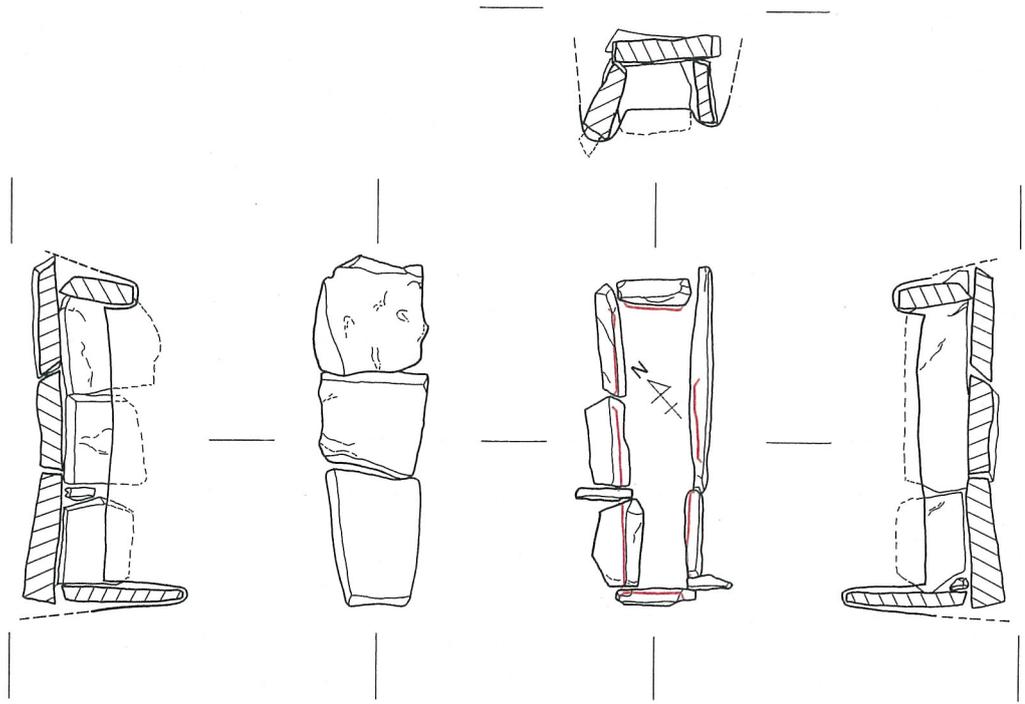
第6号墓(第10図)

第6号墓は尾根中央部やや西寄りに位置し、第3号石棺から西へ約1mのところにある。石棺が埋置されている墓壇内の底面は長さが135cm、幅が中央部で49cm、深さは現状では西側が最大で49cmある。この床面からは棺材の上端の高さを揃えることと棺材の安定を図るための掘り込みが東側から3ヶ所、南側に1ヶ所確認できる。またこの床面は北側が南側に比べて約10cm程高くなっており、北側から南側にかけてゆるやかに傾斜している。石棺の規模は内法で長さが105cm、幅が北側の小口で34cm、南側の小口で17cm、高さが中央部で21cm、主軸はN30°Eである。石棺は側壁として東側に3枚、西側に2枚の板石が横長に、小口として北側に1枚の板石が横長に、南側に1枚の板石が縦長に使用されている。側石と小口石の組み方は両小口とも側石が小口石を挟んでいる。また側壁と小口の板石は墓壇内の底面の傾斜に沿って設置されており、本石棺は北側の小口石の上面のレベルが南側のものに比べて約10cmも高くなっている。蓋石は3枚の板石が使用されているが、南側のものが縦長に、残り2枚が横長に配置されている。中央と南側の蓋石間には約10cmもの大きな隙間を確認できるが、他の石棺の設置状況等から築造時にこれほどの隙間が開いていたとは考えにくく、石棺が南側に下る傾斜に沿って設置されていることから築造後蓋石が動いた可能性がある。被葬者の頭位は棺内の幅が南側よりも北側が広いことから北方向と考えられる。また棺内において厚さ5～10cmの棺床土が確認できることから、石棺の床面と考えられるレベルは中央部で202.8mである。

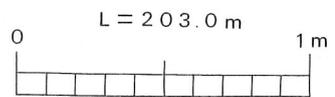
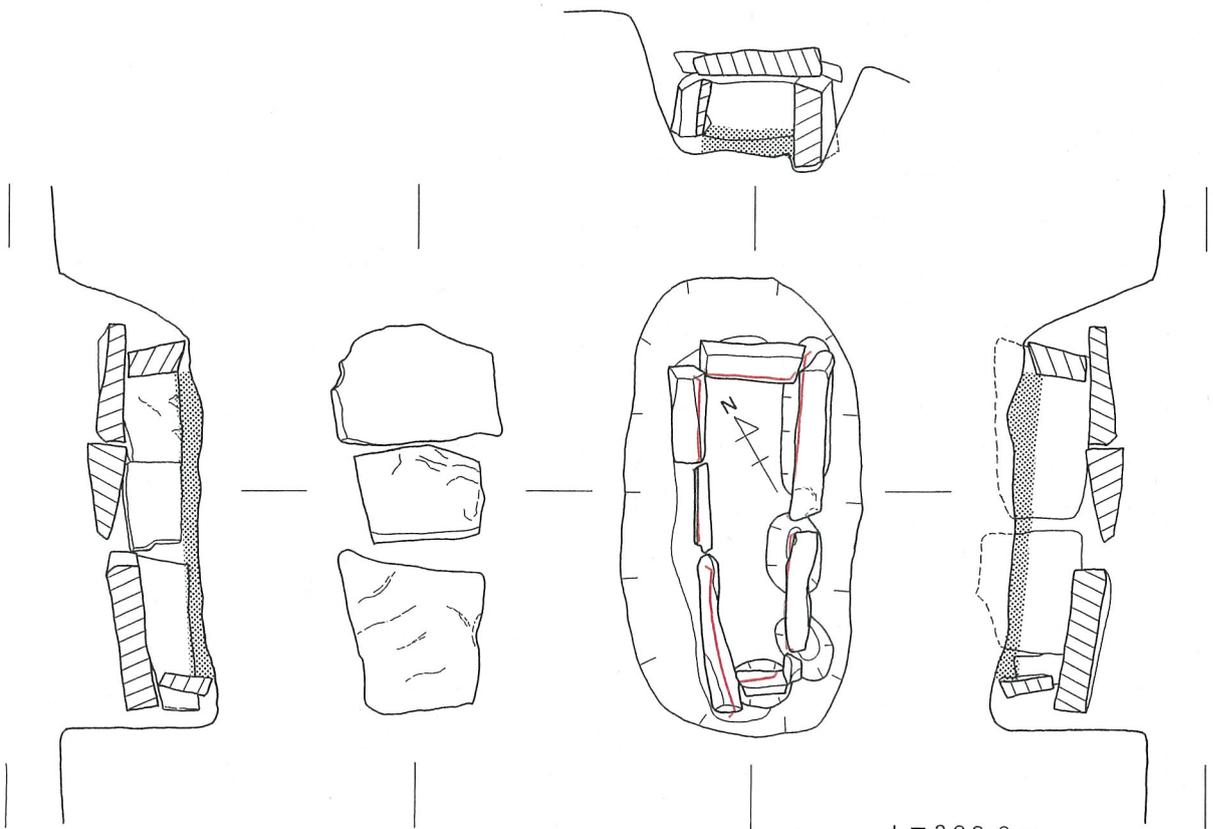
なお石棺の内部には土砂が充満していた。また人骨及び遺物は出土しなかった。

第7号墓(第11図)

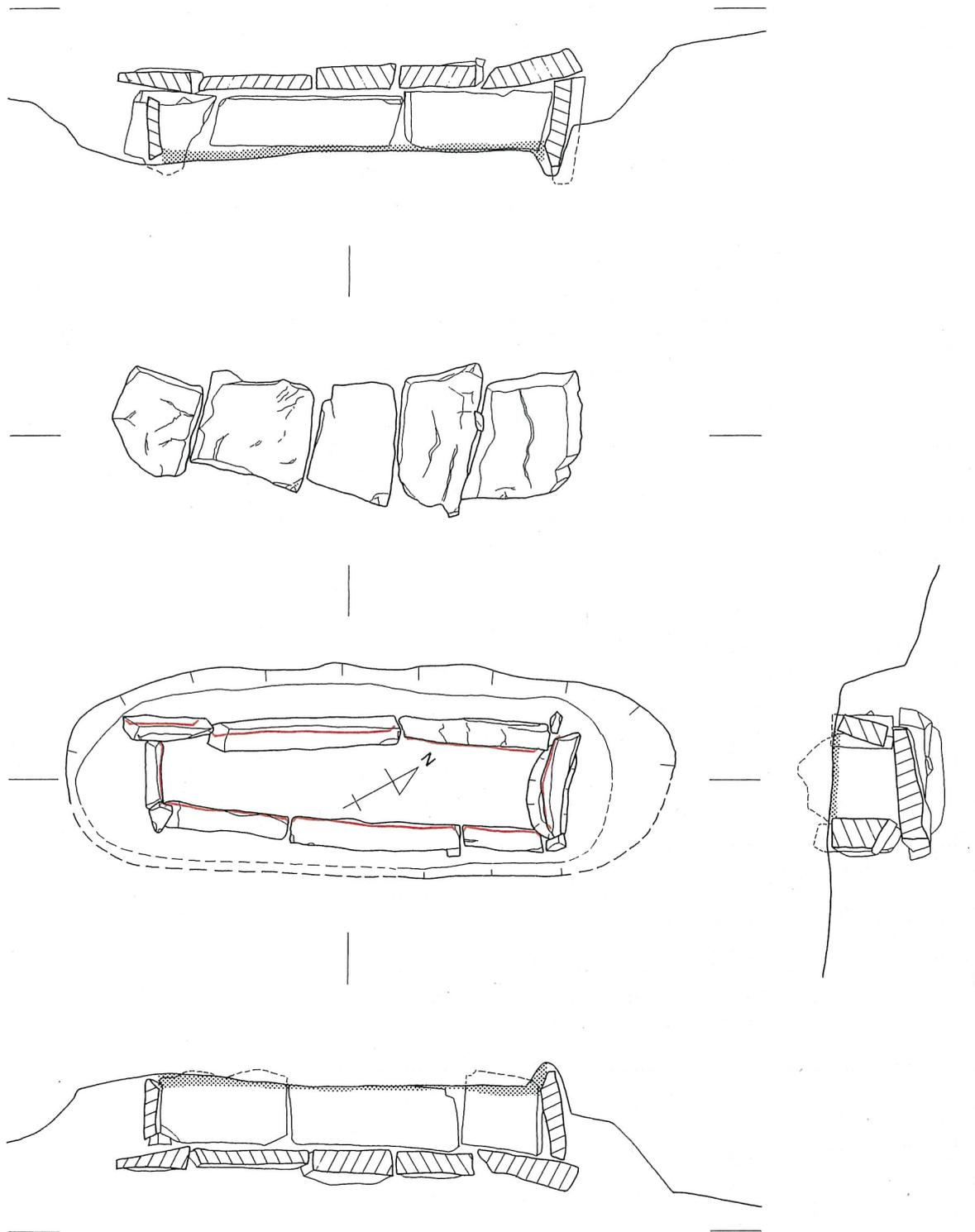
第7号墓は尾根中央部やや西寄りに位置し、第4号石棺から南西へ約0.5m、第6号石棺から西へ約0.5mのところにある。石棺が埋置されている墓壇は南側の1/4と東側の一部が確認できなかったものの現存する部分から推定して墓壇内の底面は長さが約220cm、幅が約70cm、深さは現状では西側が最大で20cmである。石棺の規模は内法で長さが15cm、幅が北側の小口で34cm、南側の小口で2cm、高さ



第9図 第5号墓実測図 (S = 1 : 30)

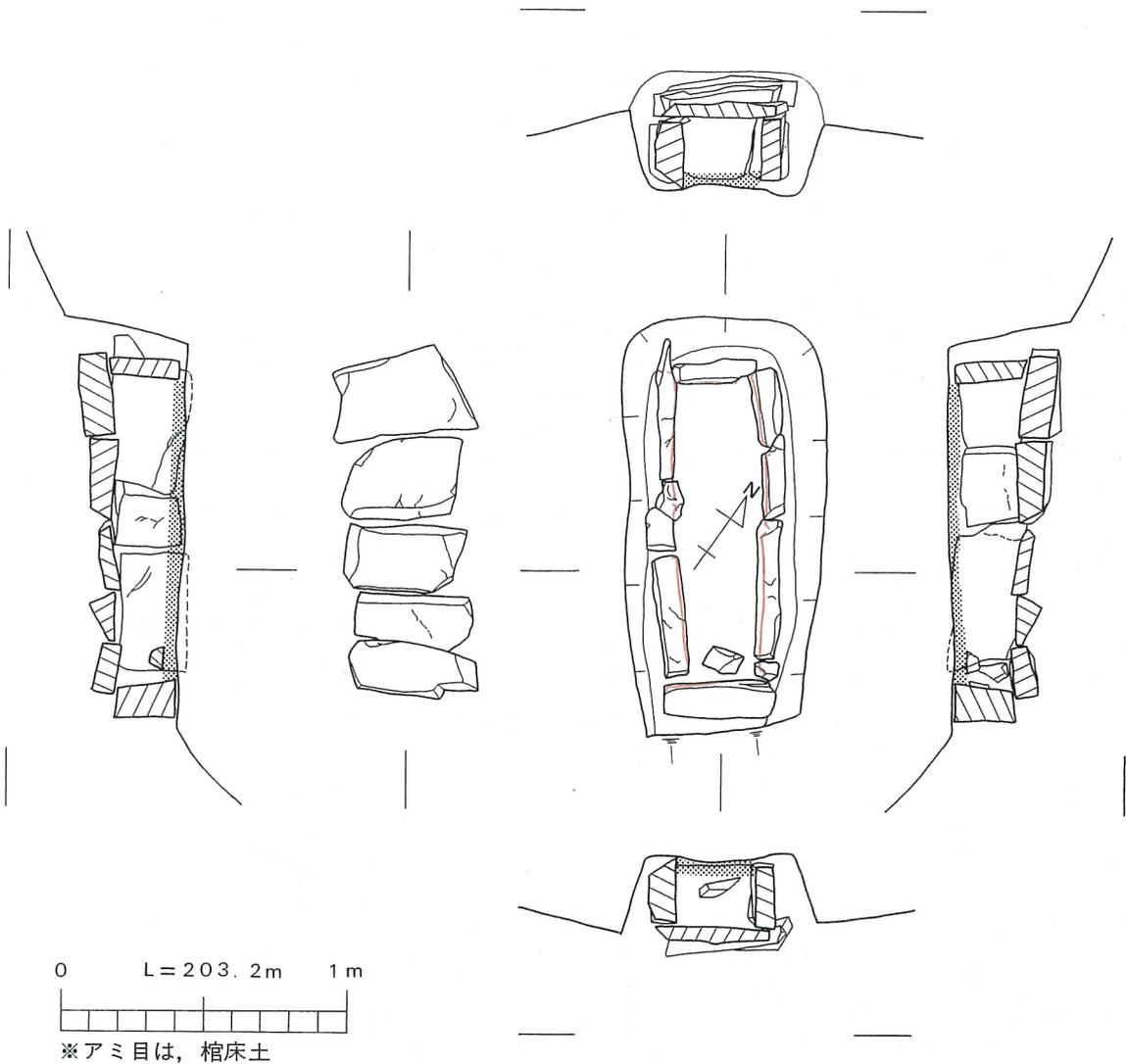


第10図 第6号墓実測図 (S = 1 : 30) ※アミ目は、棺床土

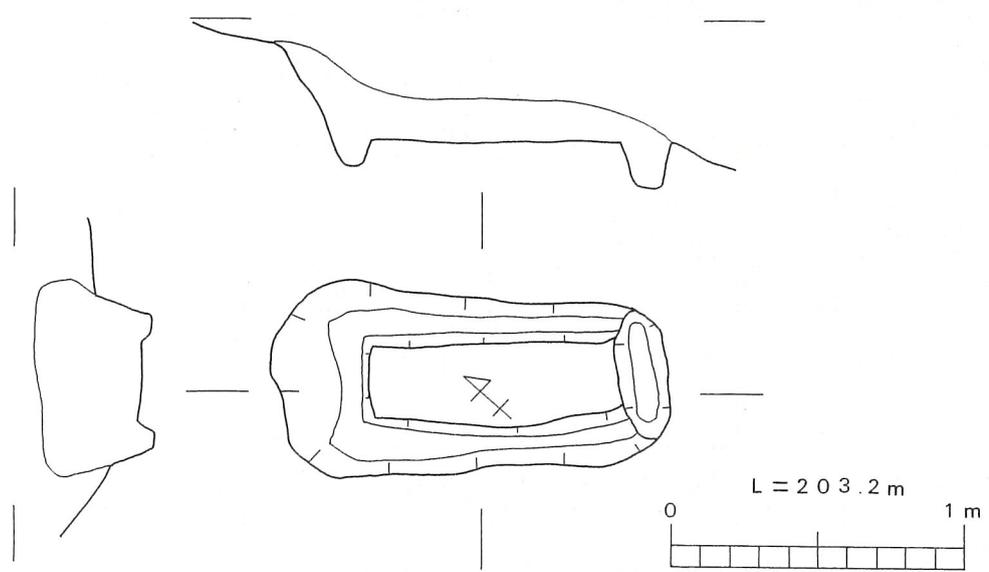


L = 203.0 m
 0 1m
 ※アミ目は、棺床土

第11図 第7号墓実測図 (S = 1 : 30)



第12図 第8号墓実測図 (S = 1 : 30)

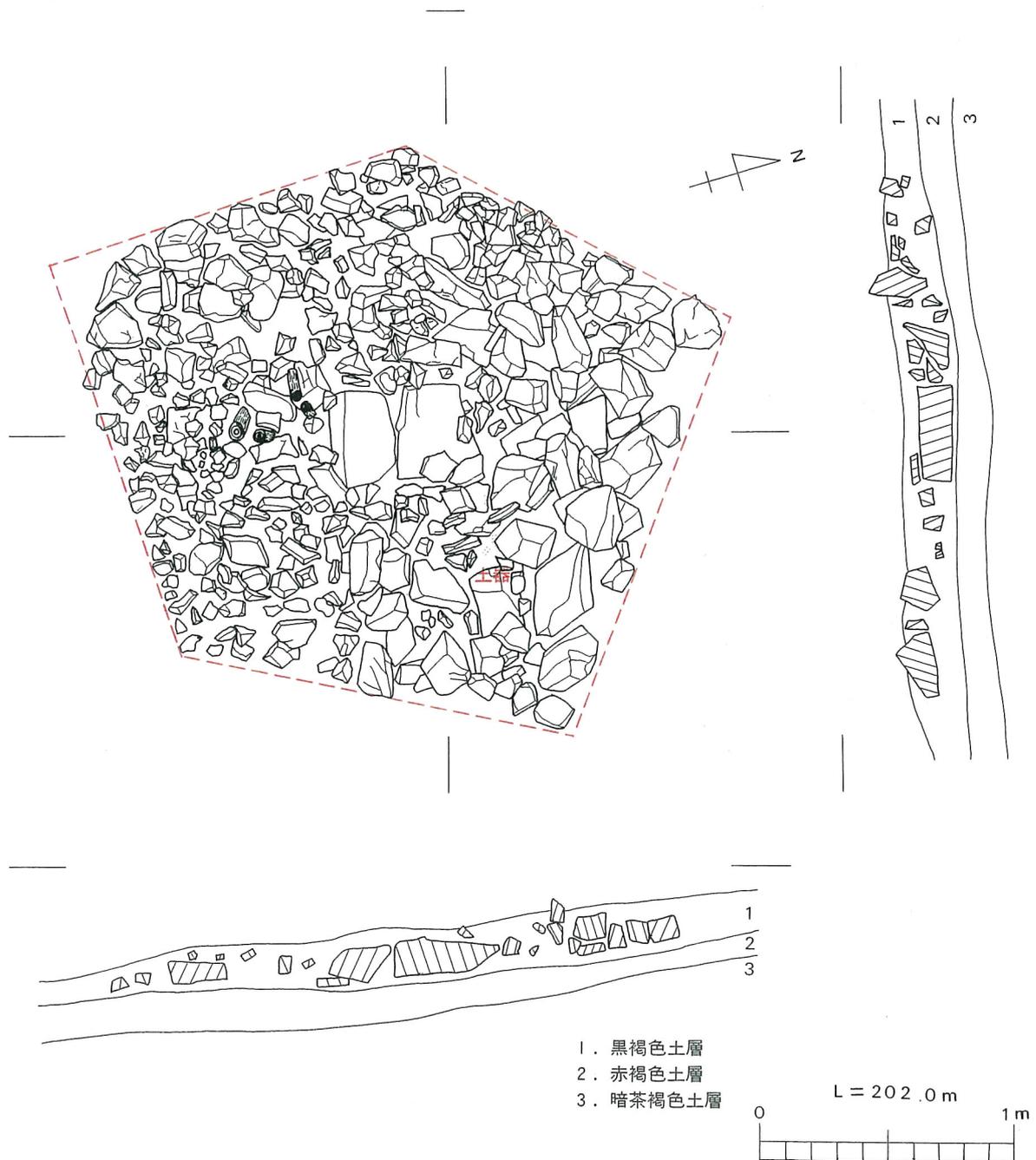


第13図 第9号墓実測図 (S = 1 : 30)

板石の北東側と南西側の隅には30cm前後の比較的大型の角礫が、その他の部分では10cm以下の比較的小型のものがそれぞれ置かれている。

また遺構のほぼ中央に位置する板石をはじめとする本遺構の下方の埋土中からは、掘り込み等の人為的な施設の痕跡は確認できなかった。

ところで、中央の板石の北東側にある角礫の間から土師質土器の破片が出土しており、その特徴から本遺構は中世の時期に築造されたものと考えられる。



第14図 中世の配石遺構 (S = 1 : 30)

が中央部で26cm,主軸はN30° Eである。石棺は側壁として東側と西側に各3枚の板石が,小口として北側と南側に各1枚の板石がいずれも横長に使用されている。北側の小口と両側壁の北端との間には隙間をうめるために角礫が詰め込まれている。側石と小口石の組み方は北側の小口では小口石が側石を押さえているが,南側の小口では東側の側壁の南端に合わせて小口石を据え置いたと考えられる。蓋石は5枚の板石が使用され,概ね横長に配置されているが,他の石棺に比べて各釜石間の隙間が大きく開いている。被葬者の頭位は棺内の幅が南側よりも北側が広いことから北方向と考えられる。また棺内において厚さ約5cmの棺床土が確認できることから,石棺の床面と考えられるレベルは中央部で202.4mである。

なお,石棺の内部には土砂が充満していた。また人骨及び遺物は出土しなかった。

第8号墓(第12図)

第8号墓は本墳墓群内の西側に位置し,第7号石棺から西へ約0.5mのところにある箱式石棺である。石棺を埋置している墓壇は南側に傾斜する斜面を掘り込んで造られているため,南東側の一部が確認できなかったものの現存する長さは136cm,幅は中央部で52cm,深さは現状で北西側が最大で38cmある。この墓壇内の床面には,棺材の上端の高さを揃えることと棺材の安定を図るための掘り込みが周回している。石棺の規模は内法で長さが116cm,幅が北側の小口で23cm,南側の小口で26cm,深さが19cm,主軸はN34° Wである。石棺は側壁として東側と西側に各3枚の板石が横長に,小口として北側と南側に各1枚の板石が縦長に使用されている。東側の側壁の南端と南側の小口との間にその隙間をうめるために幅約7cmの角礫が詰め込まれている。側石と小口石の組み方は北側の小口では側石で小口石を挟んでおり,南側の小口では小口石で側石を押さえている。蓋石は5枚の板石が横長に使用されているが,北側のものが大きく南側に配置されているものほど小さくなる傾向がみられる。この蓋石の大きさの傾向から被葬者の頭位について判断すれば,北方向と考えられなくもない。しかしながら,石棺内の南側の小口近くのはほぼ中央の床面から長さ約12cmの小型で比較的平らな石が確認でき,この石がいわゆる枕石として利用された可能性も考えられることから,南方向と捉えることもできよう。すなわち,本石棺の被葬者の頭位については,現状では両方向が考えられることから,ここでは明確にしえない。また棺内において厚さ約5cmの棺床土が確認できることから,石棺の床面と考えられるレベルは中央部で202.4mである。

なお石棺の内部には土砂がかなり流入していた。また人骨及び遺物は出土しなかった。

第9号墓(第13図)

第9号墓は本墳墓群内で最も西側に位置し,第8号石棺の北西に隣接した本墳墓群内唯一の土壇墓である。本土城塞は南側に傾斜する斜面を掘り込んで築造されているため,南西側の一部が欠失しているが現存する墓壇の床面は長辺が109cm,短辺が46cm,深さは現状では北西側が最大で35cmで,主軸はN43° Wである。掘り方のプランは長方形で底面はほぼ平坦である。また底面の南側では深さ16cmの掘り込みが1ヶ所確認できるが,これ以外では深さ3~10cmの掘り込みが周回して乱れこれらの掘り込みはそれぞれ側板,小口板を立てるためのものと考えられることから,この土壇には木棺が埋置されたと考えられる。

なお墓土壇の内部からは遺物は出土しなかった。

(2) その他の遺構

中世の配石遺構(第14図)

本配石遺構は墳墓群から南東方向へ約1.5mの標高約202m付近の尾根上に位置し,黒褐色土層内で確認された。本遺構のほぼ中央には2枚の板石が配置されており,それらのまわりに大小の角礫が不規則に置かれている。これらの礫群はあたかも2枚の板石をほぼ中央として五角形を呈するように窺える。乱またこれらの

IV 遺 物

本遺跡からは、弥生土器をはじめ縄文土器、土師質土器、石鏃、石材等が出土したが、出土量はごく少量で、出土遺物の多くは弥生土器である。なお土器についてはすべて破片で出土したうえ、原形を想定し得るものがごく少量であるため、図示できたものはごくわずかである。また配石遺構内から土師質土器が出土した以外は遺構に伴う出土遺物はなく、その多くは発掘調査範囲東側の斜面から出土したものである。

ところで弥生土器の多くは暗黄褐色土層や赤褐色土層から出土したもので、これらの土層の下層である暗茶褐色土層から縄文土器が出土した。

弥生土器(第 15 図)

No.	出土位置	器 種	寸法 (cm)	器 形	調整・成形
1	東側斜面	不明		口縁端部は肥厚し、2条の凹線がある。	外面； 口縁部はナデ仕上げ1条 内面； 口縁部はナデ仕上げ
2	東側斜面	不明		丸底の底部で、丸みをもって斜め上方へ立ち上る。	外面； ハケ目後、強いハデヘ 内面； ラ削り。底部にナデの痕跡あり。
3	南側里道横のトレンチ内	不明		口縁端部は肥厚し、2条の凹線がある。	外面； 磨滅が激しく不明。ナ 内面； デ仕上げ。

(調査区内出土遺物)

縄文土器(第 15 図)

No.	出土位置	器 種	寸法 (cm)	器 形	調整・成形
4	東側里道近くの斜面	浅鉢形土器		口縁部はやや肥厚しながら内湾し、端部に至る。端部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ状工具を使用したのち、丁寧なナデを施す。 外面には、縄文地の 上にV字形の沈線を施したのち、一部の文様を磨り消している。(磨消縄文)

4と同様な文様をもつ縄文土器が出土した広島市内の遺跡としては、矢野小学校校庭遺跡⁽¹⁾(広島市安芸区)や八木城山追跡⁽²⁾(広島市安佐南区)等が挙げられる。

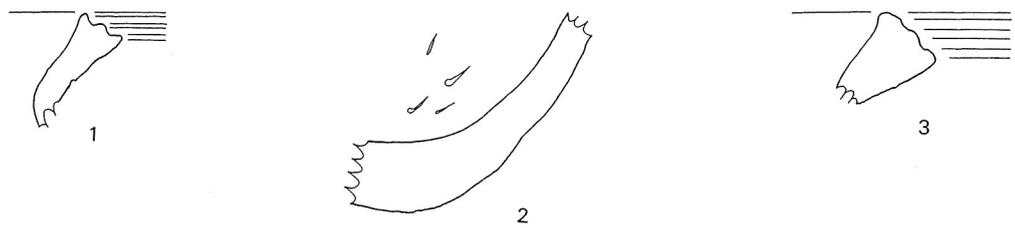
石鏃(第 15 図)

5は発掘調査範囲東側の斜面から出土した。長さ1.8cm、幅1.6cmで基部は内湾し、茎を持たない凹基無茎石鏃である。幅は基部において最も広く、頭部の側縁は若干外湾している。石材として安山岩が用いられているが、極めて緻密で堅く、肉眼では鉱物結晶を確認することができなかった。

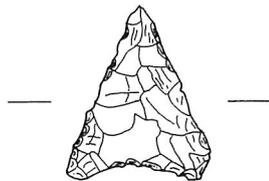
注

(1)松崎寿和・潮見浩 「先史時代の広島地方」『新修広島市史 第1巻 総説編』 1961

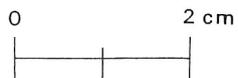
(2)河瀬正利 「歴史のあけぼの」『高陽町史』 1979



4



5



第15图 出土遺物実測図

V ま と め

1. 番谷遺跡の墳墓群について

番谷遺跡からは、今回の調査により石棺墓8基と土墳墓1基からなる墳墓群を確認することができた。8基の石棺については、第1号石棺を除いて遺存状態が良く、極めて良好な資料を得たといえる。

本墳墓群は、林道工事によって第1号石棺が発見されたことが契機となって確認されたものであり、第1号石棺より北側の部分については現状では削り採られているため、墓域が広がってこの部分に墳墓が存在したかどうかについては明確にしごたい。しかしながら、本墳墓群が存在する尾根についてみると尾根筋が本墳墓群の北東方向から第2号及び第3号石棺、さらに第4号石棺方向に延びており、尾根の幅もかなり狭い。そして、この尾根上の南西側については緩斜面となっているが、調査結果では墳墓は発見されなかった。これらのことから、南西側同様に第1号石棺の北側についても尾根の平坦面が延びていたとは考えにくく、緩斜面であった可能性が高いものと思われる。さらに第1号石棺の東側に延びる緩斜面についても墳墓が確認できていないことなどから、第1号石棺の北側の削られた部分に本墳墓群に伴う墓域が広がっていたとは考えられない。

さて9基の本墳墓群の中で第4号墓及び第5号墓を除く残りの7つの墳墓については、石棺及び木棺を埋置した墓壇の掘り方の形跡を確認することができた。このような状況のなか、9つの墳墓について棺内の床面と考えられるレベルをみると、第1号墓が203.3mと若干高いものの残りの8基については202.4～202.8mと大きな差がみられないことから、本墳墓群はまず尾根の斜面を削り込んで下方の斜面に盛土を施して平坦面を造りだした後、墓域を設定して墳墓を次々と築造していったことが推定できる。

ところで本墳墓群は尾根の比較的狭い範囲のなかに9基の墳墓が集中して築造されているにもかかわらず、それぞれの墳墓についてみると第2号石棺と第3号石棺のように隣接するものや、となりの墳墓と0.5～2m程しか離れていないような近接するものはみられるもの、お互いに切り合い関係をもつものはみられない。すなわち各墳墓を築造する際に、それ以前に築造された墳墓の位置をある程度確認したうえで新しい墳墓が築造されたことが考えられる。以上のことから本墳墓群は比較的短期間に連続して墳墓が築造された可能性が高いと考えられる。

次に本墳墓群内における墳墓の築造順についてだが、上述のように切り合い関係がみられないことなどからすべてを明確にすることはできないものの、第2号墓と第3号墓については第2号墓の石棺を取り囲むように立てられた南側の板石が第3号石棺の蓋石の上部の埋土中にあることから判断して、この2基の墳墓はほぼ同時期に築造されたかもしくは第3号墓築造後、わずかな期間をおいてすぐに第2号墓が築造されたことが推測できる。しかしながら、この2基の墳墓が本墳墓群が営まれていた時期のどの時点で築造されたかは現状では明確にしえない。

さて8基の石棺をみると、いずれも箱式石棺で基本的な構造において大きな相違点は見られないものの石棺の規模をみると大きく2つに分けることが可能であろう。まず棺内の内法の長さが158～180cm、幅が40cm前後、高さが30cm前後の規模の比較的大型の石棺で、5基(第1号、第2号、第3号、第4号、第7号)ある。残りの3基(第5号、第6号、第8号)は棺内の内法の長さが100cm前後で、幅が30cm前後、高さが20cm前後の規模の比較的小型の石棺である。このような石棺の規模の相違は単に埋葬される者の体格の違いを表すものと考えられることから、規模の大きな石棺は成人用で、規模の小さな石棺は小児用と考えることが

できよう。また第9号墓については底面に掘り込みを確認したことから、木棺が埋置されたと考えられるが、その想定される内法は長さ109cm、幅46cmである。このことから第9号墓は小児用の墳墓と考えられる。ただし、佐久良遺跡では、石棺の内法で長さ173cmの第2号石棺から成人2体と小児1体の人骨が、石棺の内法で幅43cm、高さ30cmの第3号石棺からも成人2体分の人骨がそれぞれ検出されていることから、本墳墓群内で成人用と考えられる大型の石棺については2人以上が埋葬されていた可能性も考慮すべきであろう。さらに成人用と考えられる墳墓と小児用と考えられるの墳墓の分布状況については、どちらかが特定の場所に集中していたり、一定の規則性をもって配置されたものとは考えられず、本墳墓群内で混在しているあり方を示しているといえる。

とはいえ、第2号墓については他の7基の石棺と何ら変わりがないものの、先述したとおり板石6枚と角礫2個が確認されていることから、この墳墓には本墳墓群内に埋葬された人々のなかで特別に扱われた人物が埋葬された可能性が高いと思われる。

次に9基の墳墓のうち、第1号墓から第7号墓の7基は尾根筋に平行ではなくほぼ垂直に石棺を築造しているが、このことは墳墓群のある尾根が緩斜面で斜面を削り込んで墓域を設定しているため、東西方向に墓域の範囲が狭いことが要因のひとつとして挙げられよう。そして、第1号墓、第8号墓及び第9号墓を除く6基については、石棺内の幅や蓋石の大きさなどから判断して頭位を北東の方向に向けて埋葬したことが考えられる。また第1号墓については石棺内の幅や釜石の大きさなどから判断して頭位をほぼ北側に向けているものの、上述したとおり尾根が緩やかに下っている地点でしかも等高線に沿うように築造されていることなどから立地の制約を受けてこの方向に築造されたものと考えられる。したがって第1号墓も先述した6基と同様に北東側を意識して築造されたことが想定できよう。

以上のことから第8号墓及び第9号墓を除く7基については、北東方向に頭位を向けて埋葬したことが推定されることから、埋葬にあたって何らかの規制が働いた可能性が考えられる。

次に本墳墓群の築造時期についてだが、本墳墓群に伴う出土遺物がないことから明確にしがたいもの本墳墓群については以下のような状況がみられる。

- 1)本墳墓群のある尾根上からは北東乃至南方向は開けて眺望がよい。
- 2)9基の墳墓のうち、8基が箱式石棺で、規模の相違があるものの構造上大きな相違は見られない。
- 3)棺内をはじめとして墳墓に伴う遺物が出土しなかった。
- 4)9基の墳墓をみると隣接しているものや近接しているものがみられるものの、いずれについても切り合い関係がみられない。

また今までの発掘調査から、広島湾周辺の弥生時代の墳墓群の特徴として、

①集落を臨む丘陵上にある、②日常の生活を営む場所とは異なる場所に隔絶された状態で存在する、③どの墓も相互に造り方や立地にほとんど差がない状態で発見される、⁽²⁾などが挙げられていることから、本墳墓群は弥生時代の墳墓群の特徴を示していると考えられる。また本遺跡内からの出土遺物の多くが弥生土器であり、しかもそれらのほとんどが墳墓が確認できた暗黄褐色土層からの出土であることなどからも上述のように弥生時代の墳墓群の可能性が高い。さらに図示した弥生土器(1)、(2)は口縁部のみとはいえ、上深川I式の特徴を示しているとみられることから、本墳墓群は弥生時代後期に築造された可能性があり、しかも比較的短期間のうちに終焉を迎えたと考えることができよう。

また本墳墓群に埋葬された集団だが、本遺跡周辺からは現在のところ住居跡等の集落関連遺構は全く確認されていないことから、現状では明確にしがたいものの、頭位が出身集落を示しているという説も⁽³⁾あること

や、南原側の谷に向けて延びる尾根が幅も広く、よく発達している点等から判断して、本遺跡の北東方向すなわち南原側の集団によって本墳墓群が築造された可能性があると考えられることもできよう。しかしながら、上述のとおり現状では周辺の状況が明確でないことなどから断定することは避け、今後の周辺の発掘調査結果に期待し、改めて判断したい。

ところで、本遺跡から東方向へ約2.2kmに位置する丸子山遺跡からは、成人用、小児用合わせて15基の箱式石棺が混在して築造されているのが確認されており、弥生時代中期から後期にかけて営まれた墳墓群と捉えられている。また本遺跡から北東方向的12.5km地点には成人用、小児用合わせて10基の箱式石棺を中心とする墳墓群が確認された佐久良遺跡が存在し、弥生時代中期後半頃に営まれたと推定されている。これら2つの遺跡は本遺跡同様に太田川、三篠川以北で確認された弥生時代の墳墓群であり、しかもその中心が箱式石棺であることが共通点として挙げられる。つまり、現在までに可部あるいは白木地域で発掘調査により確認された弥生時代の墳墓群については、いずれも箱式石棺を中心とする集団墓地であるといえることから、現時点では、太田川、三篠川以北の可部あるいは白木地域では箱式石棺が弥生時代の墳墓の形態の主流であったと捉えることもできよう。しかしながら、確認された墳墓群が3遺跡のみであることから明言は避け、今後のこの周辺での発掘調査結果に期待したい。

2. 番谷遺跡の石棺の石材について

番谷遺跡の石棺の石材について、風化の度合い、鉱物組成といった岩石学的特徴をもとに分類を行ったところ、あるひとつの岩体から採取されているとみられる石材が数基の石棺に使用されている例がみられた。同一の岩体から切り出された石材が、複数の石棺に使用されている例は、このほかに2岩体分ほどみつきり、それぞれ他の石棺と区別する鍵として用いることができる。番谷遺跡では、このように鍵になる3種類の石材がそれぞれ組合わされて使用されており、これらの石材を追跡することで、石棺同志の類似性や石棺製作の際の当時の人々の行動を明らかにする資料が得られるのではないかと考え、若干の検討を加えてみることにした。

番谷遺跡の石棺に使用されている石材は、その全てが花崗岩と花崗斑岩から構成されている。地質図を参照してみれば、番谷遺跡一帯は中生代白亜紀末(80Ma前後)の貫入とみられる広島型花崗岩の分布地域であり、遺跡周辺はもとより遺跡内も花崗岩・花崗岩風化物で占められていることから、石材の選定に当たっては近在の材料を利用していたとみるのが妥当であろう。そこで、石棺を構成する石材をより詳しく観察してみたところ、鉱物の組成、あるいは風化の進行状況などから特徴的な石材を抽出できた。これらの石材はそれぞれ、①優黒色で緻密、表面は滑らかで、節理面等を利用し比較的丁寧に切り出されているもの、②①より若干切り出し方が荒いが、既存の比較的深い割れ目を利用して切り出しているもの、表面は緻密かつ滑らかなもの、石材によってはやや赤色を呈すこともある、③優白色で緻密ではあるものの風化が進行し、粒子等の抜け上がりが見られるもの、といった特徴をもつ3種類の石材で、それぞれ現状から母材は、①広島型花崗岩の中でも成分の安定した比較的新鮮な岩体、②①の岩体と同様に表面はなめらかであるが、より風化が進行し、全体として脆いもの、③①、②の岩体よりも長期間にわたり外部露出していたため風化が進行している岩体、といった特徴をもつものと推定される。遺跡の周囲を踏査した結果、これらの石材を産する岩体は、それぞれ①山腹斜面(特に南原側の北面)、②山腹斜面(特に亀山側の南東面)、③露出した独立岩体(特に遺跡より上部の斜面)に分布している。

これらの特徴的な石材の石棺別の使用状況と、石棺での使用部位について次表にまとめる。

	第1号墓 側板蓋石	第2号墓 側板蓋石 冢石	第3号墓 側板蓋石	第4号墓 側板蓋石	第5号墓 側板蓋石	第6号墓 側板蓋石	第7号墓 側板蓋石	第8号墓 側板蓋石
!優黒色・緻密・丁寧	◎ △	◎ △	△ ○	◎			○	◎
"優黒色から赤色・ 緻密・やや荒い				○		○	◎	
#優白色・緻密・風化	◎	△ ◎	◎		◎	◎		◎ ◎

◎ = 3枚以上の使用 ○ = 2枚使用 △ = 1枚使用

各石材毎に使用部位の特徴をみれば、①の石材は直線的に切り出され、大きさ、厚さとも大きく、形も整っていることから比較的大型の石棺である第1,2,3,4,7号墓を構成する石材として蓋石や側板に使用されている。

く、そのため荷重

が側板と接する2点に集中する蓋石には使用されず、大型・小型をとわずに荷重が面全体に分散する側板として使用されている。

③の石材は風化が進行しており大型の石材はほとんどなく、特に第5,7,8号墓など小型石棺の蓋石、側板および大型石棺の長さ調整用の側板として使用されている。

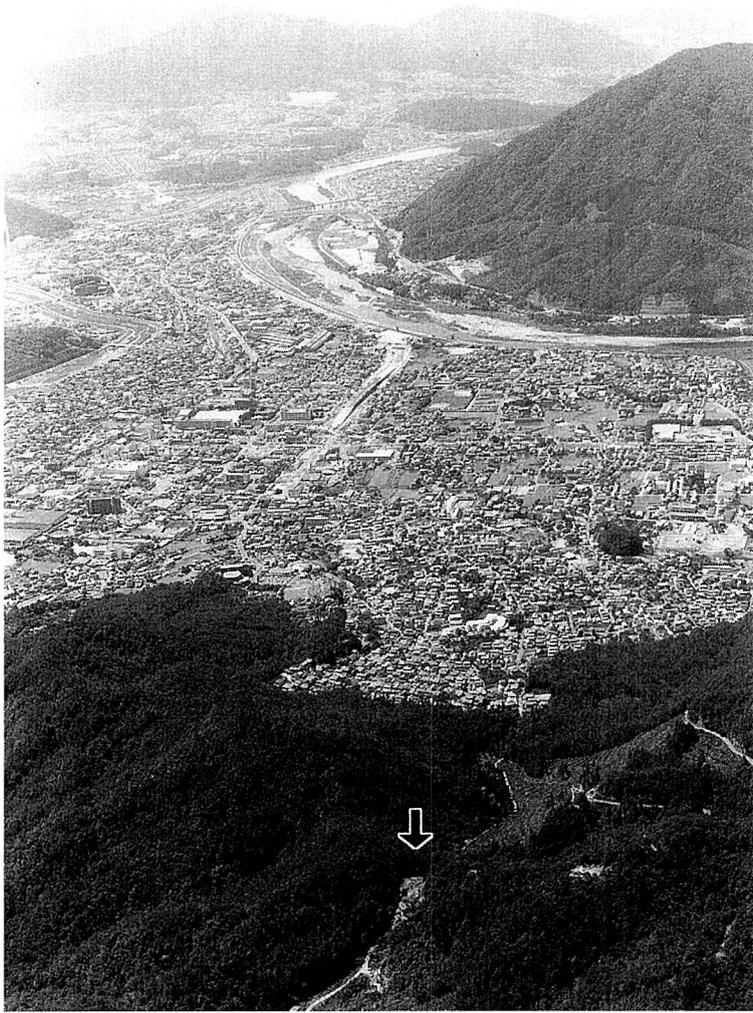
以上のことをまとめてみれば、同種の石材でも蓋石、側板いずれにも使用されていることから、部位による使い分けについては現時点では明確にしえない。しかしながら、大型の石棺には大型で頑丈な石材、小型の石棺には小型の石材というように石棺の大きさによる使い分けがみられ、小型の石棺(第5,6,8号墓)については側板、蓋石とも③タイプの岩相の類似した石材が多用されており、石材の調達先がほとんど1か所で済まされていたものと考えられる。一方、大型の石棺についてみると①タイプの石材が各所に使用されており、このタイプの石材もその岩相からほぼ同じ岩体から調達されたものとみられる。これらのことから、番谷遺跡の石材については、石棺毎や時期毎に石材の調達場所が異なっていたわけではなく、石棺の大きさに応じて最も適した石材を露頭から採取して来たものとみられる。

以上のように、石棺に使用されているひとつひとつの石材について岩石学的特徴をもとに考察を加えたことにより、石棺に対するひとつの新しい視点を提示しえたように思える。しかしながら、今回の考察はわずか8基の石棺の分析にしかすぎず、なおかつこれまで同様の分析の事例がみられないため、現段階ではこれ以上の判断は困難であるといえよう。また今後、同様の分析による類例の積み重ねによって石棺の大きさや使用部位等による石材の使い分けなどを明らかにしていくことが、これからの課題であろう。

注

- (1) 広島市教育委員会 『佐久良遺跡発掘調査報告』 1984
- (2) 幸田淳 「井口の歴史のあけぼの」 『井口村史』 1992
- (3) 都出比呂志 「墳墓」 『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』 1986
- (4) 石田彰紀 「中山の歴史のあけぼの」 『中山村史』 1991
- (5) 広島県 『広島県地質図及び同解説書』 1950
- (6) 山口県地学会 『山口県の岩石図鑑』 1954

版 圖



a. 番谷遺跡（北から・調査前・航空写真）



b. 番谷遺跡遠景（南西から・調査前・航空写真）



a. 番谷遺跡からの風景（南方向・太田川側）



b. 番谷遺跡からの風景（北方向・南原側）



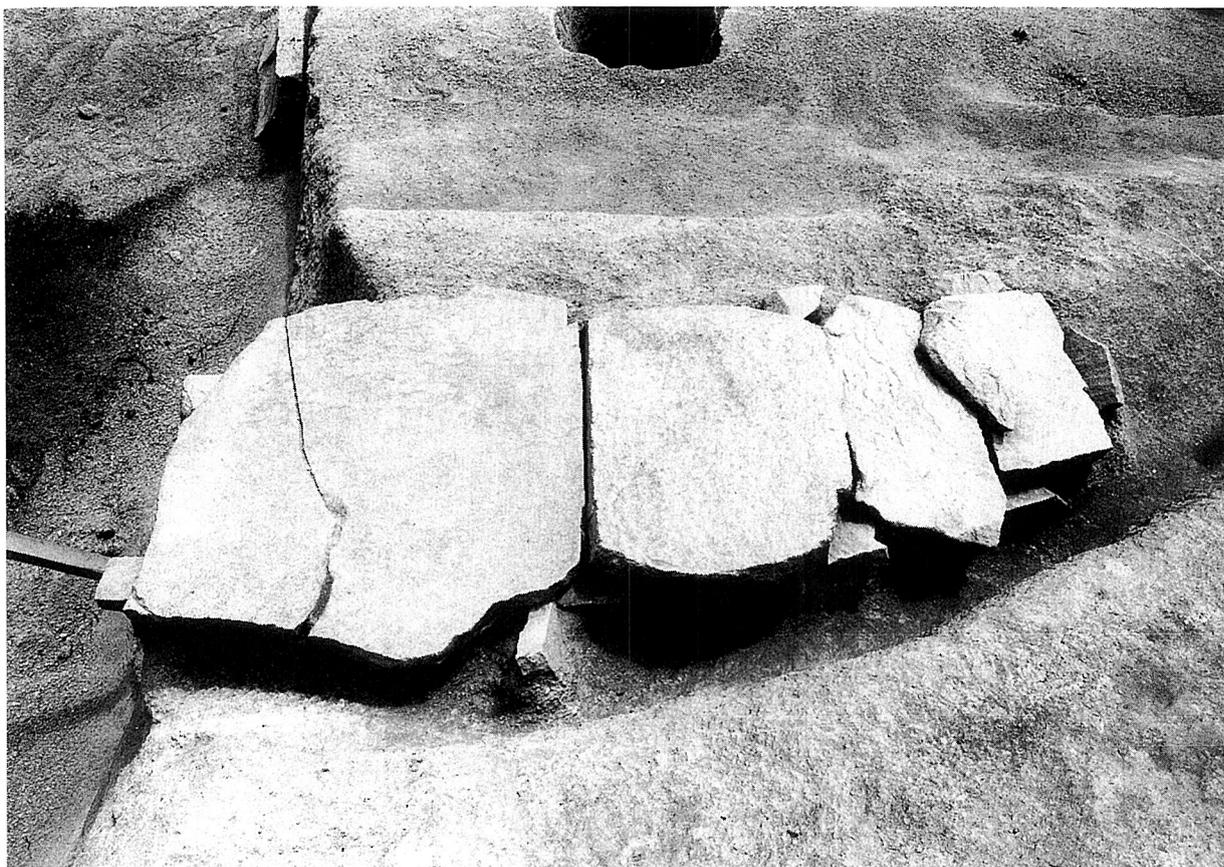
c. 番谷遺跡近景（東から・調査後）



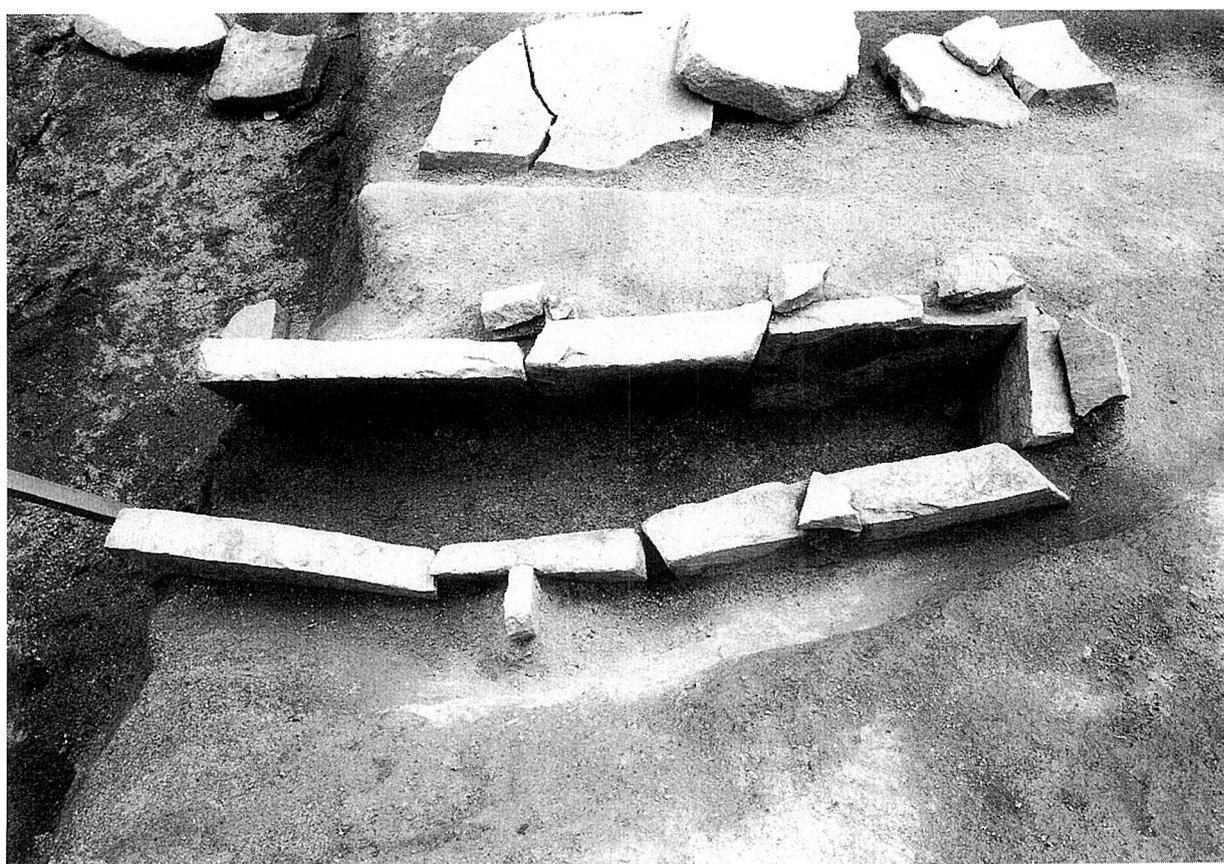
a. 番谷遺跡近景 (南西から・調査後)



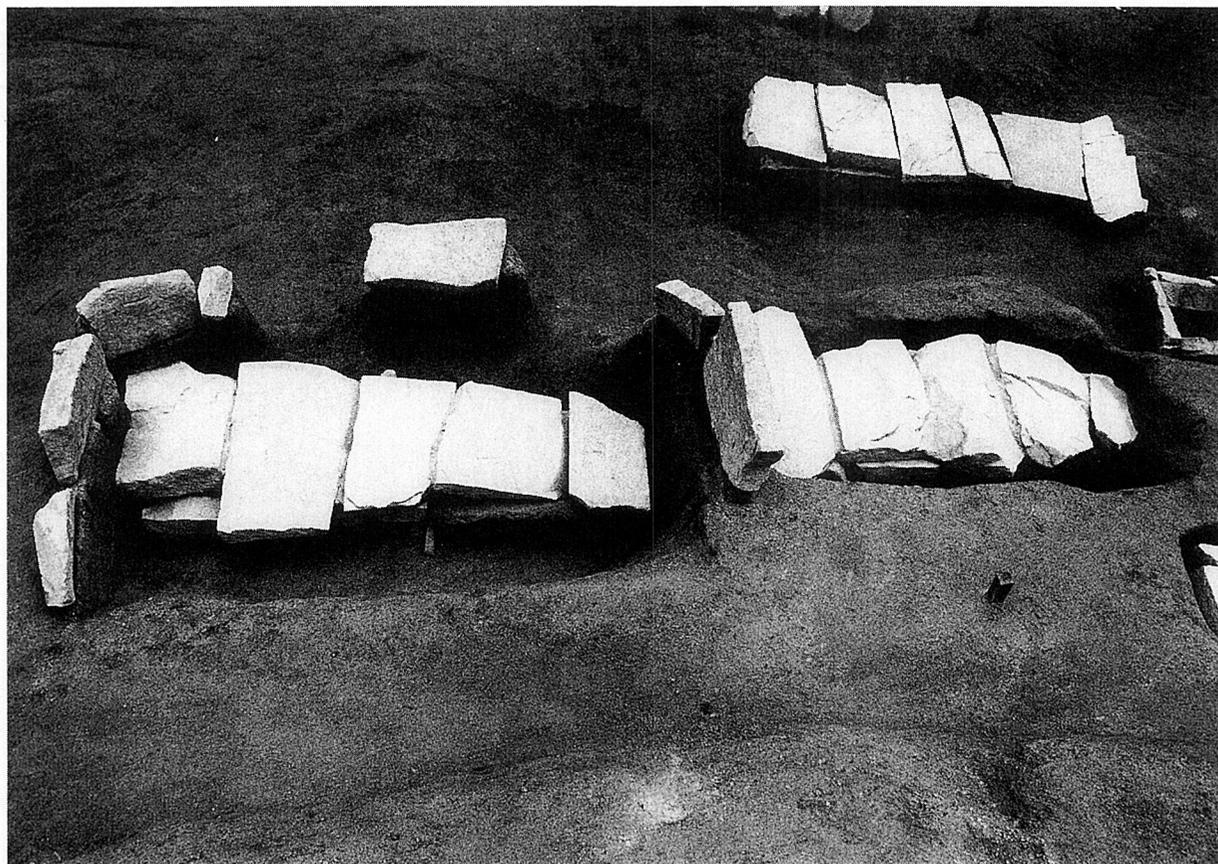
b. 林道工事中に発見された第1号墓 (北から)



a. 第1号墓（開棺前）



b. 第1号墓（完掘後）



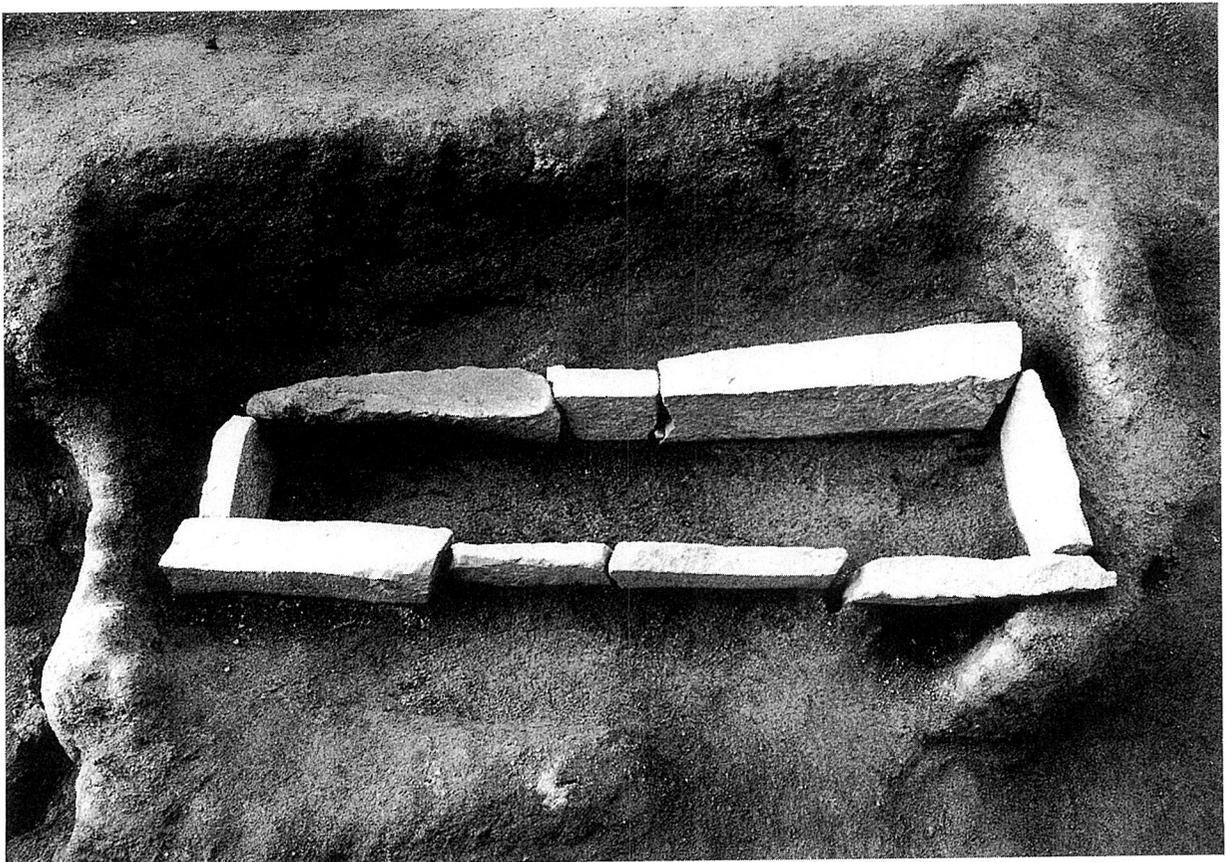
a. 第2・3・4号墓 (西から)



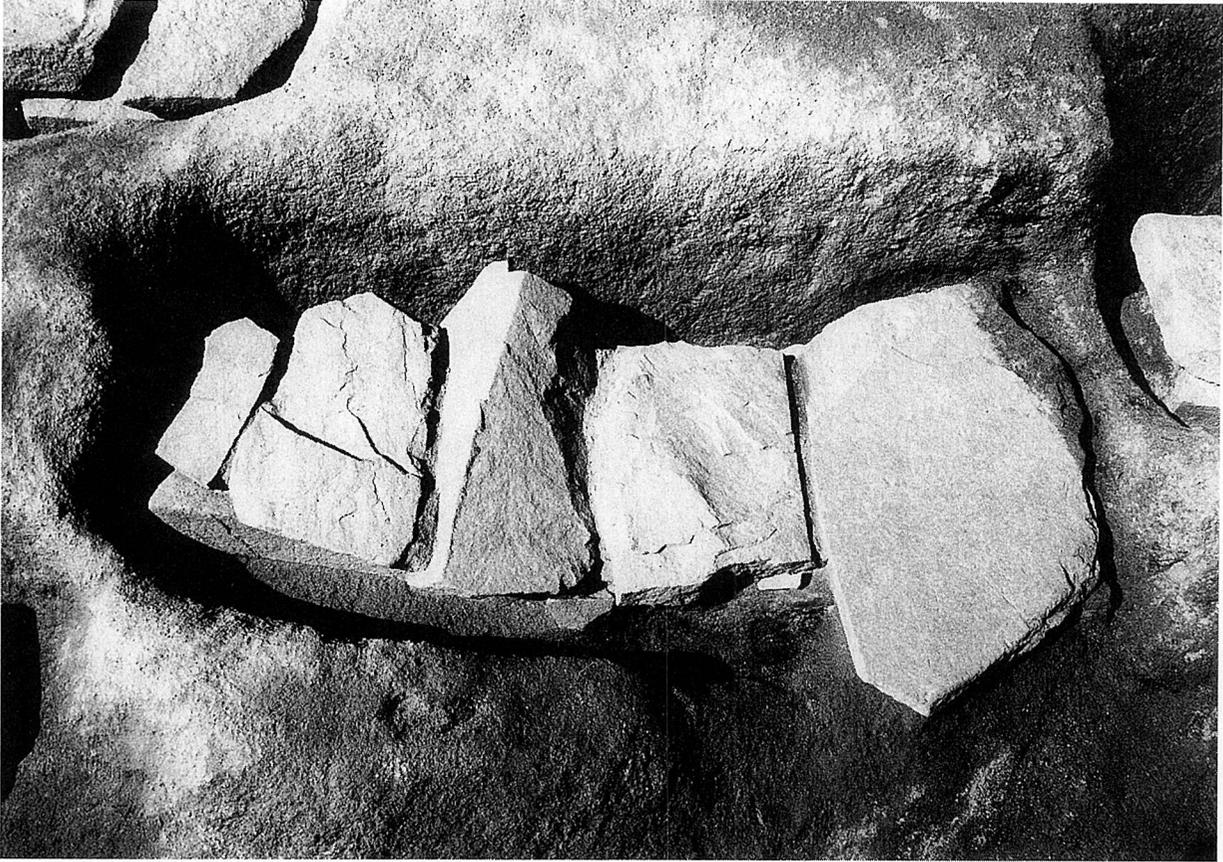
b. 第2号墓 (検出状況)



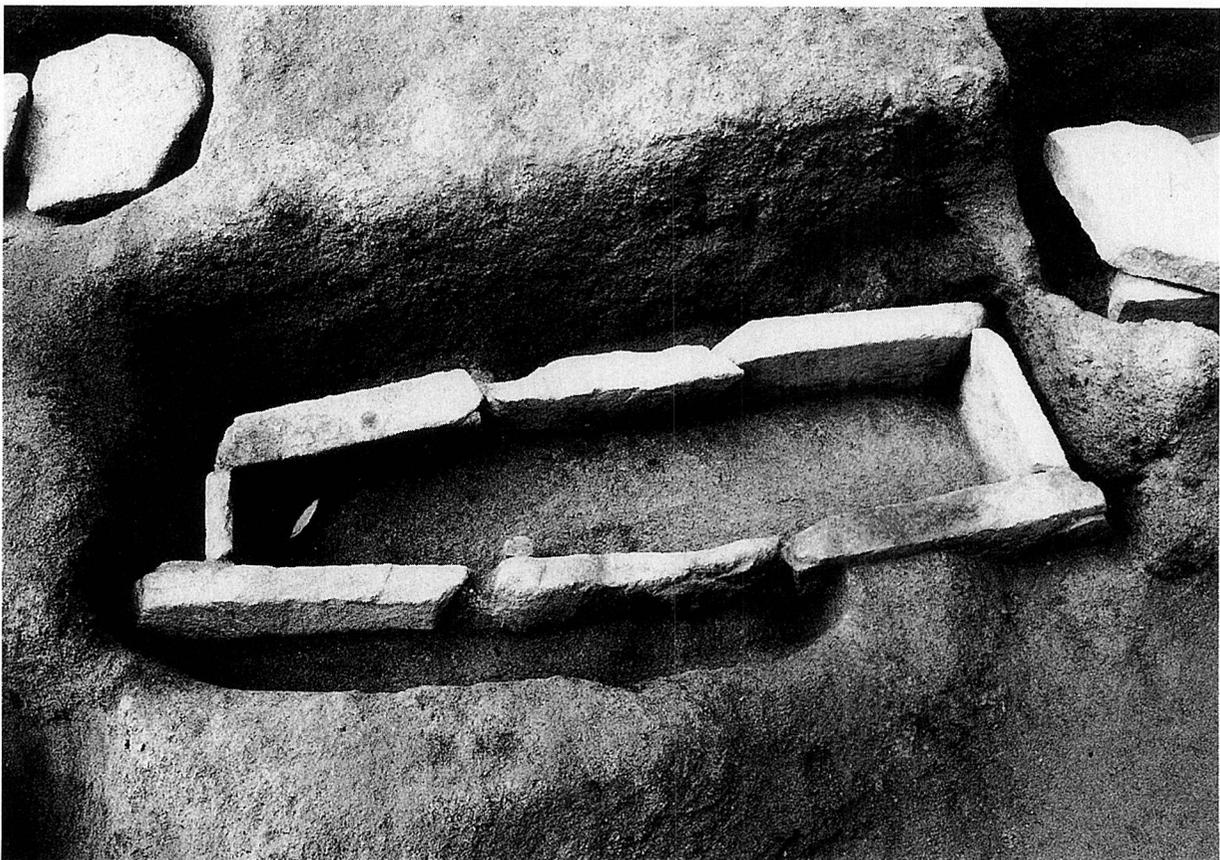
a. 第2号墓（開棺前）



b. 第2号墓（完掘後）



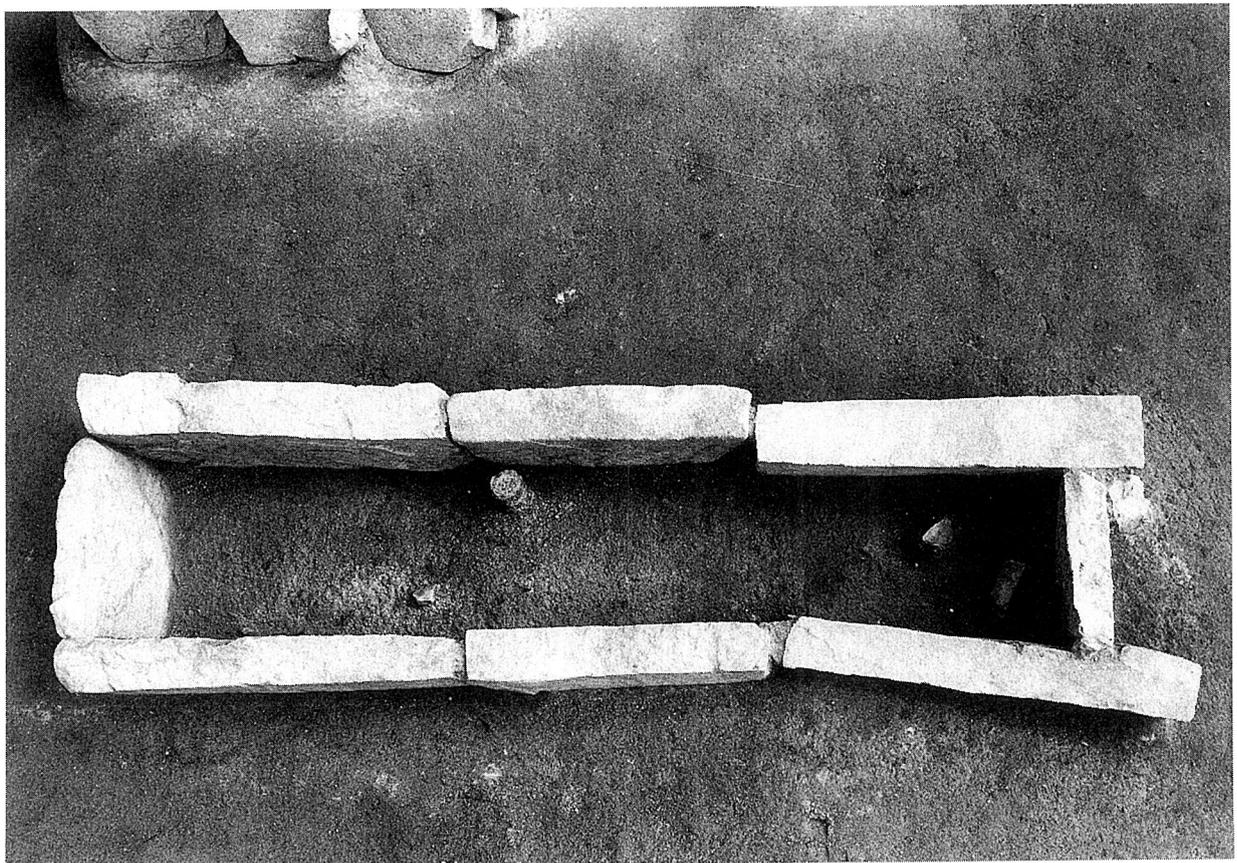
a. 第3号墓（開棺前）



b. 第3号墓（完掘後）



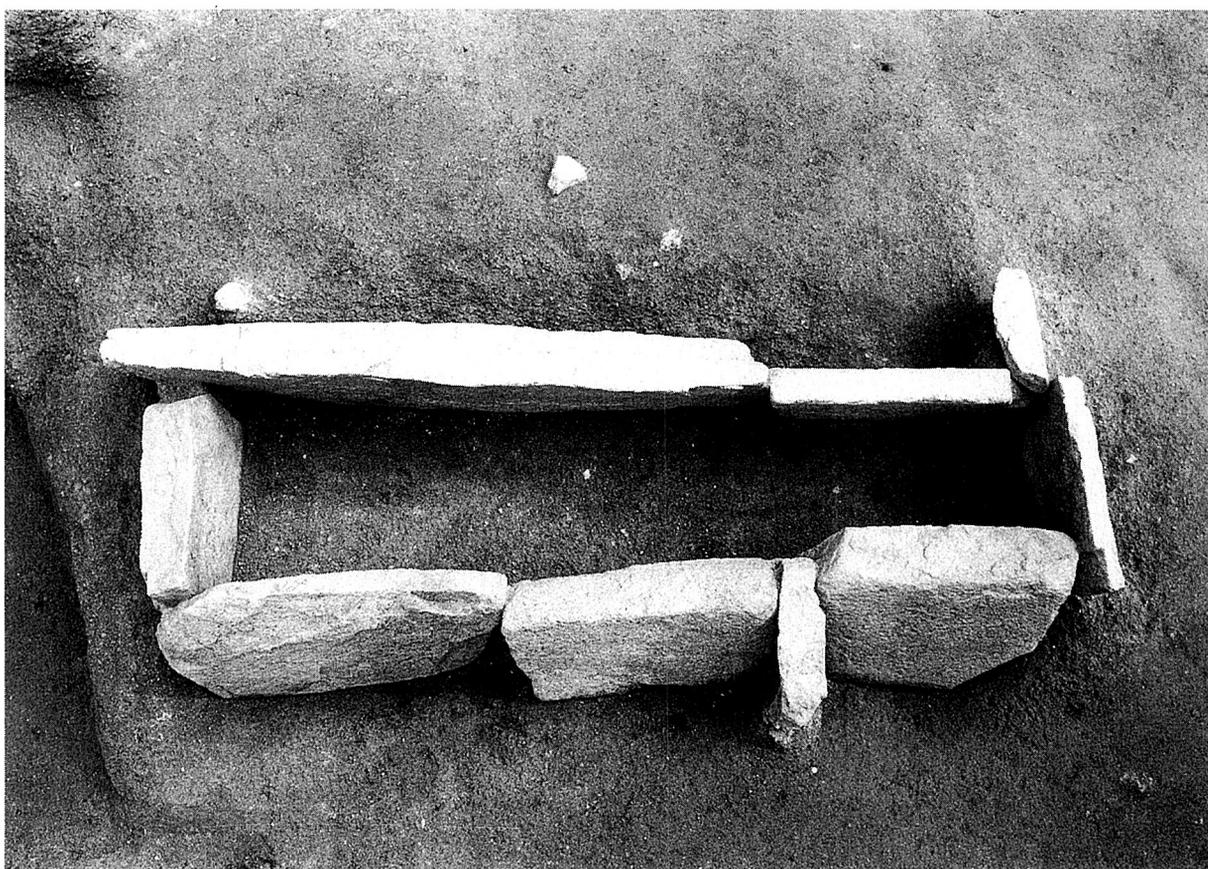
a. 第4号墓（開棺前）



b. 第4号墓（完掘後）



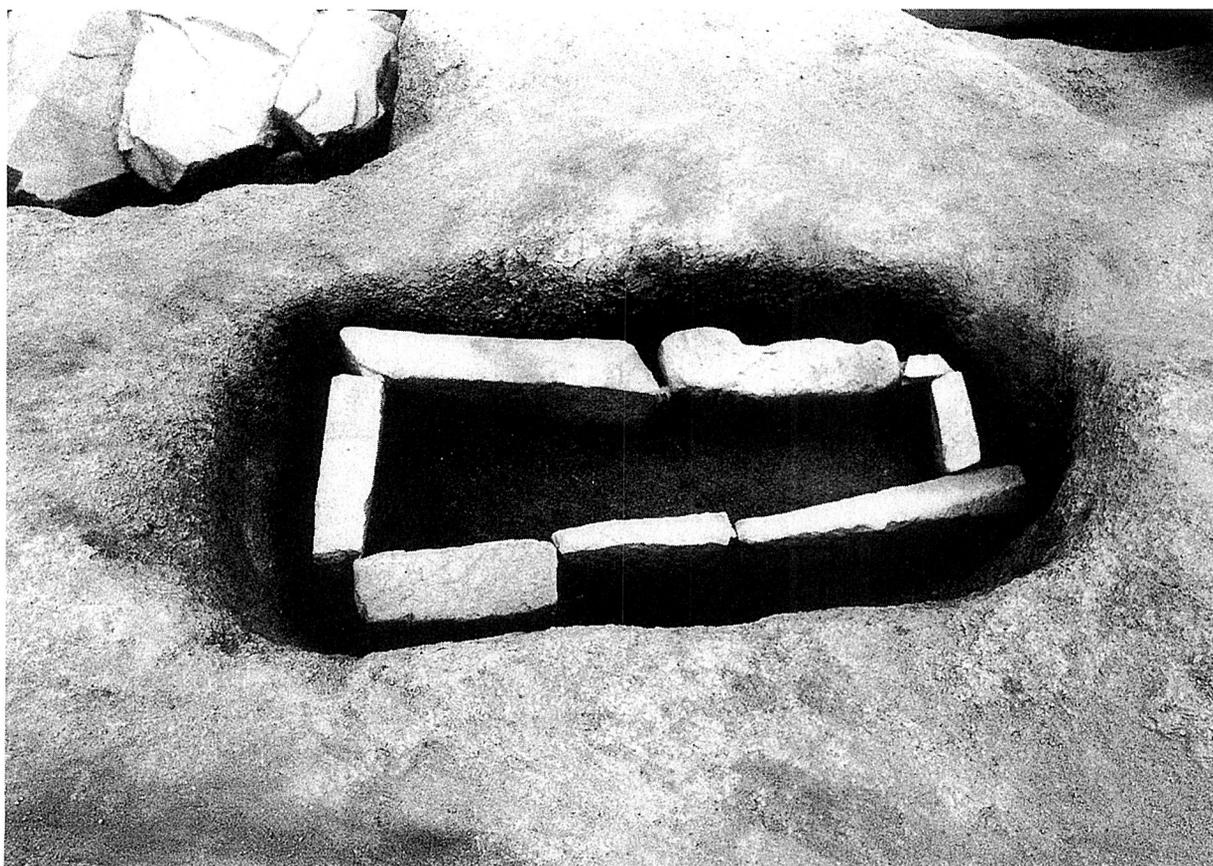
a. 第5号墓 (開棺前)



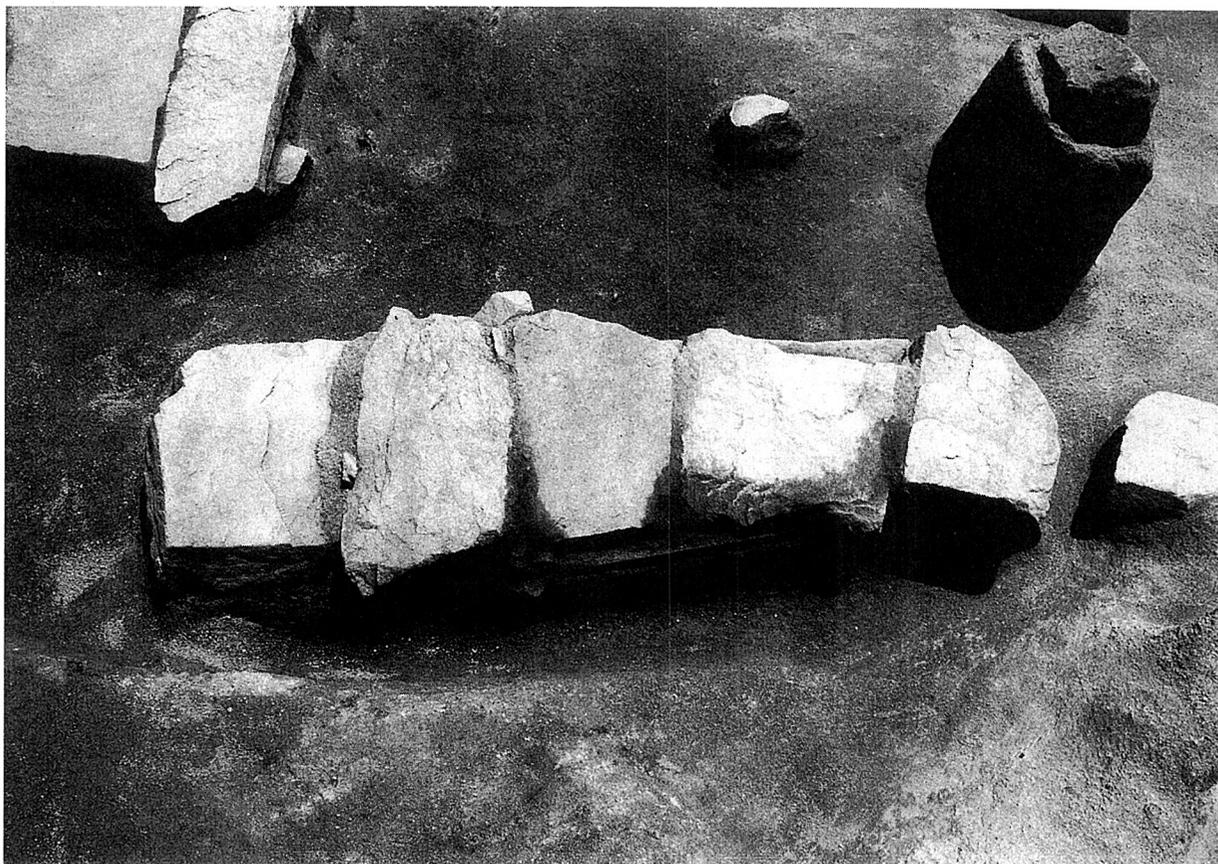
b. 第5号墓 (完掘後)



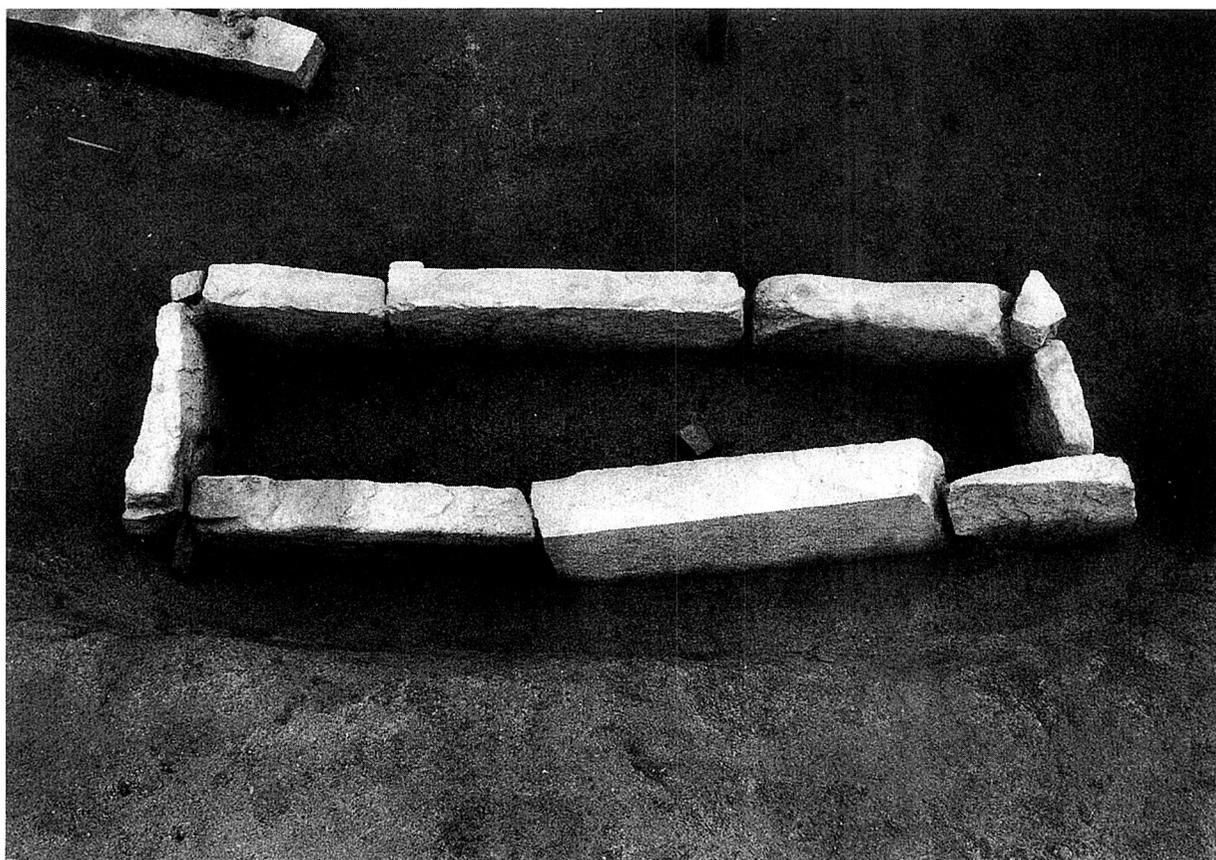
a. 第6号墓（開棺前）



b. 第6号墓（完掘後）



a. 第7号墓（開棺前）



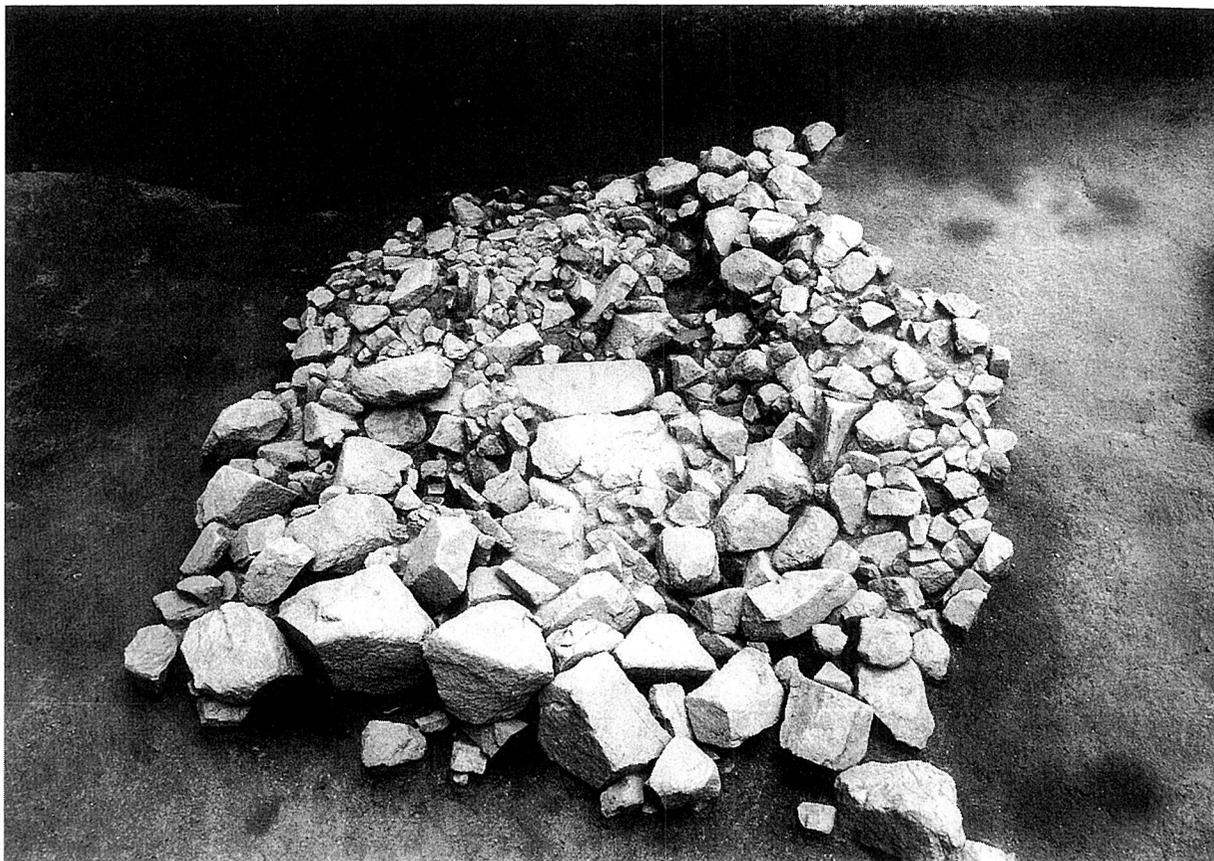
b. 第7号墓（完掘後）



a. 第8号墓（開棺前）と第9号墓



b. 第8号墓（完掘後）と第9号墓



中世の配石遺構（東から）



1



2



3



4



5

(×1)



石材 (安山岩) (1/3)

出土遺物 (1~4は1/2)

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第20集

広島市安佐北区可部町所在

番谷遺跡発掘調査報告

1997年3月

編集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発行

広島市国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印刷 産興株式会社

広島市中区舟入南1丁目1番18号